稲荷山館跡
（いなりやまたてあと）

第３次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第208集

平成25年

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター(平成24年4月1日に財団法人から移行)が発掘調査を実施した、稲荷山館跡の調査成果をまとめたものです。

稲荷山館跡は、山形県南東部に位置する米沢市万世町梓山にあります。中世以降、米沢市は長井氏から伊達氏、そして上杉氏と領有者が移り、近世以降は上杉氏の城下町として発展してきました。本館跡は長井氏が領有していた時期に建てられたといわれております。伝承によれば本館跡の城主は伊達氏がこの地に侵入してきた際に最後まで長井氏側として抵抗したといわれております。

この度、一般国道13号米沢拡幅事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、本遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、事前に確認されていた土塁を含め、土塁に並行して掘られた堀跡、建物を構成していたであろう柱穴、さらに井戸跡等が検出されました。堀跡からは多くの陶磁器が出土し、堀跡の埋没年代について考察しうる多大な成果を得ることができました。また、内耳土鍋といわれる土器片も出土しており、本遺跡の存続年代などを考え得る結果を得られたといえます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　相馬周一郎

凡　例

1　本書は、一般国道13号（米沢拡幅）工事に係る「稲荷山館跡」の発掘調査報告書である。
2　既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
3　調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年４月１日に財団法人から移行）が実施した。
4　本書の執筆は、渡辺和行が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、斉藤敏行、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。
6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。
　　SK…土坑　　SD…堀跡　　SE…井戸跡　　SP…柱穴・ピット　　SF…土塁
7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
8　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調査要項

遺跡名	稲荷山(いなりやま)館跡(たてあと)
遺跡番号	202-405
所在地	山形県米沢市万世町梓山(ばんせいちょうずさやまあずさいなりやま)字稲荷山
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成23年度）
	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年度）
受託期間	平成23年８月22日～平成24年３月31 日
	平成24年４月６日～平成25年３月29日
現地調査	平成23年8月25日～9月22日
調査担当者	平成23年度　調査課長　安部実
	考古主幹　伊藤邦弘
	調査研究員　渡辺和行（調査主任）
	調査研究員　伊藤大介
	平成24年度　整理課長　黒坂雅人
	調査研究員　渡辺和行（整理主任）

調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課
調査協力	米沢市教育委員会
	山形県教育庁置賜教育事務所
業務委託	基準点測量業務　株式会社ケンコン
	金属製品保存処理業務　株式会社吉田生物研究所
	理化学分析業務　株式会社加速器分析研究所
発掘作業員	江袋吉男　君島七郎　斎藤功　坂野健二　佐藤孝一　中山正秋　三浦弘
	我妻清治　渡部惇　我彦多喜男
整理作業員	日下部朋子　柴田敏夫　菅井ひろみ　林真世

（五十音順）

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査の経緯……1
　2　発掘調査の経過と方法……1
　3　整理作業の経過…1
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　調査の成果
　1　遺跡の概要……8
　2　遺構……8
　3　遺物……10
　4　小結……11
Ⅳ　理化学分析
　1　ＡＭＳ測定における放射性炭素年代…16
Ⅴ　総括……19

報告書抄録……巻末

表

表1　遺跡地名表……7
表2　遺物観察表(1)……12
表3　遺物観察表(2)……13
表4　遺物観察表(3)……14
表5　遺物観察表(4)……15
表6　測定試料及び処理……17
表7　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……17

図　版

第1図　遺跡概要図……2
第2図　地形分類図……4
第3図　遺跡位置図……6
第4図　暦年較正結果……18
第5図　遺構全体図の割付図……21
第6図　遺構全体図(1)……22
第7図　遺構全体図(2)……23
第8図　遺構全体図(3)……24
第9図　調査区西壁土層断面、土壙SP1・堀跡SD2平面図……25
第10図　土壙SP1・堀跡SD2土層断面図……26
第11図　柱穴SP3・5・6・7・9・10・11・12……28
第12図　柱穴SP21・22・23・25・26、土坑SK20
　井戸跡SE13……29
第13図　堀跡SD2:Ⅰ、Ⅱ層出土遺物……30
第14図　堀跡SD2:Ⅱ層出土遺物(1)……31
第15図　堀跡SD2:Ⅱ層出土遺物(2)……32
第16図　堀跡SD2:Ⅱ層出土遺物(3)……33
第17図　堀跡SD2:Ⅱ層、Ⅲ層出土遺物……34

第 18 図　堀跡SD2:Ⅲ層出土遺物……35
第 19 図　堀跡SD2:出土遺物(1)……36
第 20 図　堀跡SD2:出土遺物(2)……37
第 21 図　遺構外出土遺物……38

写真図版

写真図版 1　土墨SF1調査前状況
写真図版 2　東側遺構検出状況、柱穴SP3・4、東側遺構集中部完堀状況
写真図版 3　東側遺構完堀状況、柱穴SP6・7・9・10
写真図版 4　柱穴SP11・12、井戸跡SE13、西側遺構検出状況ほか
写真図版 5　土坑SK20、柱穴SP21・22・23・25・26
西側遺構集中部完堀状況
写真図版 6　土墨SF1断ち割り状況ほか
写真図版 7　堀跡SD2完堀状況ほか
写真図版 8　陶器：皿内面、碗外形
写真図版 9　陶器：皿底部、碗底部
写真図版10　陶器：鉢、土瓶、小壺、小鍋
写真図版11　磁器：碗底部、鉢、青磁香炉、小壺、花瓶、蓋
写真図版12　磁器：皿（外形）、碗（外形）
写真図版13　磁器：皿（底部）、碗（底部）
写真図版14　磁器：小坏(外形)、陶器：擂鉢(外形)、植木鉢(外形)
写真図版15　磁器：小坏(底部)、陶器：擂鉢(底部)、植木鉢(底部)
写真図版16　土器：内耳土鍋、石製品：砥石ほか
写真図版17　石製品：凹石、土管、金属製品：古銭ほか

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

稲荷山館跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による国道13号米沢拡幅工事に伴って行われた。

国道13号米沢拡幅工事は米沢市内の交通混雑緩和を図るとともに、周辺の各種開発をするべく米沢市万世町梓山～米沢市万世町片子まで2.4kmを４車線化とする事業である。

稲荷山館跡は平成８年に国道沿いに整備される貯水槽の設置に伴って米沢市教育委員会が約70㎡を発掘調査している。遺構は柱穴や溝跡が検出されており、遺物は中世に属する内耳土鍋などが出土している。

また、東北中央自動車道建設に伴って（財）山形県埋蔵文化財センターが平成17年に第１次調査と同18年に第２次調査を行っている。遺構は柱穴や土坑、土塁及び堀跡が検出・調査され、遺物は内耳土鍋や古銭などが出土している（山埋文センター2008）。

今回の調査は（財）山形県埋蔵文化財センターによる第３次調査にあたり450㎡を対象に行った（第１図）。

平成23年６月23日に山形県教育委員会よる試掘が行われ、工事予定範囲に土塁と堀跡が位置すること及び館跡内部に建物跡などが残っている可能性を確認した。これを受け、当該工事範囲を発掘調査対象範囲とし国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所と８月22日に契約を取り交わした。

調査開始前に、文化財保護法第92条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届け出」を山形県教育委員会に７月20日付けで提出、受理された後「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を８月４日受け取り、８月25日発掘調査を開始した。

2　発掘調査の経過と方法

発掘調査は平成23年８月25日～平成23年９月22日までの実働20日間であった。調査開始にあたり、調査区内に放置されていた伐採された杉や木の枝を人力で除去した。その後、調査区の表土除去を開始した。調査区は残土置き場の関係から東西二分割し調査を行った。

なお、掲載している図面は東西合わせた状態である。本文においては当項以外、東西を別けて記載することはしない。但し、検出状況等の全体を撮影した写真は東西別に撮影している。そのため写真図版についてはキャプション中にこれを記す。

まず東側の調査を行った。表土除去後、遺構検出を行い、その後遺構の半截、完掘を行った。図面作成や写真撮影など記録作業も必要に応じて行った。遺物の出土地点の記録や平面図作成はトータルステーションを用い作図した。グリットの設定は行わず、世界測地系に則した基準杭を打設し、測量を行った。なお、掲載の図面にはＸ軸、Ｙ軸４ｍごとの座標値を載せている。

９月８日で東側の調査を完了し、９月９日から西側の調査を開始した。調査方法は東側に準ずる。また、西側の調査区で検出した堀跡SD2の出土遺物は、覆土土層の２～20層の内、４～８層をⅠ層、９～15層をⅡ層、16～18層をⅢ層、19～20層をⅣ層として取り上げを行った。

Ⅰ層は表土や現代に行った整地層などを含めた。Ⅱ層は整地が行われる前の段階で水の流れがほとんどない時期に堆積した層。未分解の植物遺体が確認される時期。Ⅲ層は水の流れが若干あったと考えられ、Ⅱ層より土色が黒に近い層。Ⅳ層は地山由来の土や底砂が堆積している層とした。詳細は遺構の節で述べる。

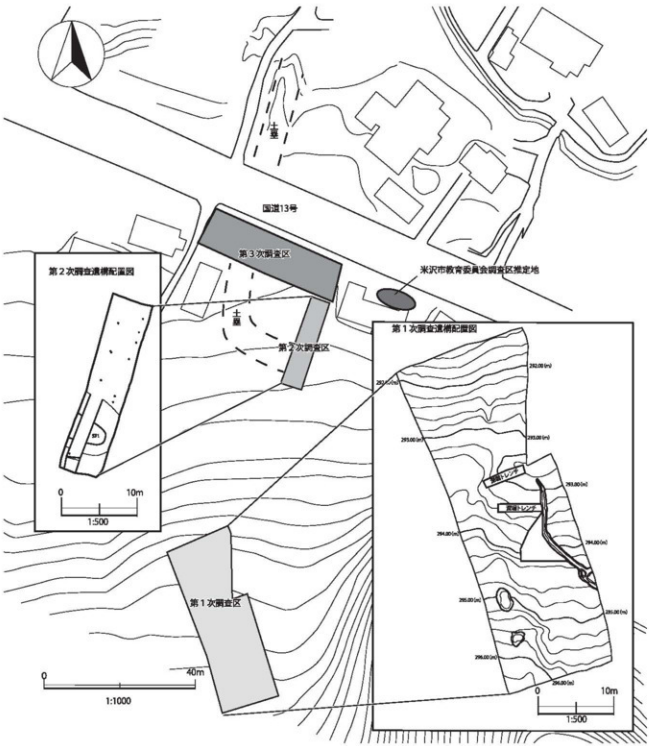
９月22日まで調査を行い、同日、事業者である国土交通省山形河川国道事務所の担当者へ発掘調査の成果を説明し現場を撤収した。

3　整理作業の経過

出土遺物は洗浄後、注記を行った。注記は遺跡名を「イナリ山３」とし、出土遺構・層位・取得座標名の順に記載した。出土年月日は省略した。その後、接合、復元、抽出、実測、拓本、写真撮影を順に行いコンテナに収納した。遺物・遺構の図面は共にデジタルトレースを行い、修正や編集を行った上で写真と共に版組を行った。

出土遺物中、重要と思われる金属製品は委託業務として保存処理を行った。遺物番号35～37及び68の計４点である。保存処理に使用した樹脂はポリビニルブチラールで37のみ破断面接合のためアルタインMHを使用している。理化学分析として業務委託を行ったのは放射性炭素年代測定で結果は第Ⅳ章に掲載した。

出土遺物は、報告書に掲載したものを別にし収納した。なお、報告書掲載遺物については図番号を注記に追加している。



第１図　遺跡概要図

※本図作成にあたっては、平成23年３月11日の東日本大震災の影響で第１・第２次の座標値と第３次調査の座標値でズレが生じているため以前の図面を参考に合成している。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

稲荷山館跡が所在する米沢市は山形県の南東に位置し、福島県と山形県の県境となっている。東に豪土山・駒ケ岳・栗子山といった奥羽山系の峰々が存在し、南には吾妻山系が位置する。西は低平な玉庭丘陵に囲まれた典型的な盆地である。気候は寒暖の差が大きい盆地性内陸型であり、年間降水量はやや少ないが冬期には降雪量が多い。また、日照時間が比較的長く、平均風速が最も強い地域である。

奥羽山系や吾妻山系に源を発する幾筋もの水は、鬼面川・松川（最上川）・羽黒川・天王川（梓川）などの河川となって氾濫原を形成しつつ北に向かって流れ、やがて合流し最上川となって日本海へと注ぐ。米沢盆地の南端から中央にかけては、各々の河川により形成された扇状地となっており、低地が多くを占める。それを利用した農地が多く、森林の割合が少ないのが特徴といえる。農地への開拓は藩政時代やそれに先立つ直江治下の際に行われた。

稲荷山館跡は、市街地から南東方向に約６km離れた万世地区に位置する。南側には早坂山が位置し、東部を天王川（梓川）が北に流れている。一帯の地形は、早坂山の山麓及び山腹の傾斜地と、天王川により形成された緩やかな扇状地上位面からなる。さらに万世地区の地形区分は天王川川谷台地・低地に相当し、表層地質は未固結堆積物の砂及び泥、もしくは礫及び砂である。土壌は表層腐植質黒ボク土壌と未区分地が広がっている。遺跡周辺の環境は現在杉林となっている。地元の方によれば明治期まで畑が広がっており、その後、杉を植林したとのことであった（第２図）。

2　歴史的環境

米沢市では670か所を超える遺跡が確認されている。なかでも当遺跡が位置する万世町地内は密集地帯となっており、縄文時代早期から中世まで各時代の遺跡が分布している(第３図)。八幡原周辺の遺跡群は、昭和50年代の道路建設や大規模な工業団地の造成に伴い発掘調査された。広域に及ぶ調査によって、遺跡相互の立地関係や時期的変遷を窺えたことは評価できよう。

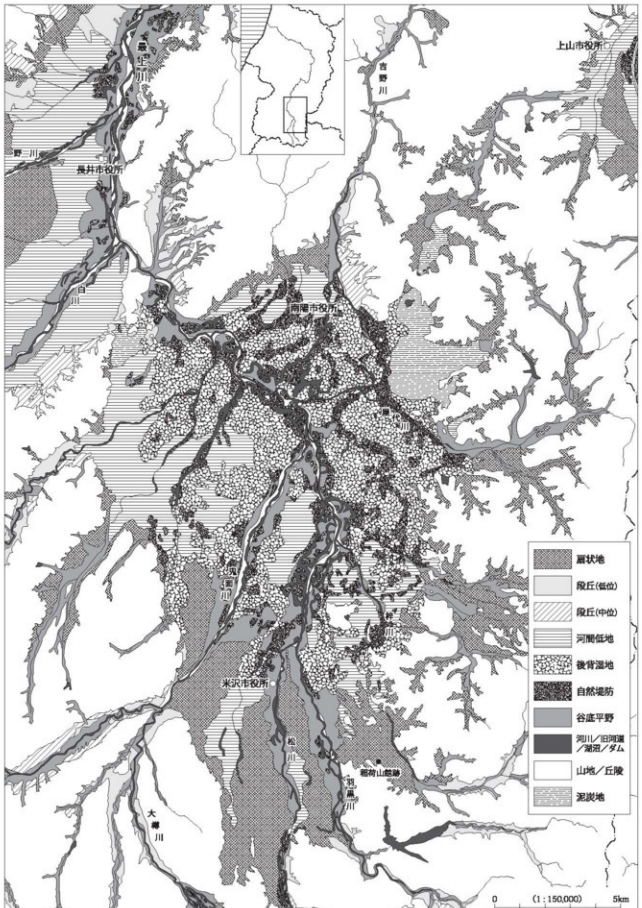
縄文時代で天王川流域の遺跡群をみると、八幡原周辺の遺跡群および桑山遺跡群を中心とした遺跡数は164遺跡であり、これは米沢市全体の縄文時代の遺跡の約4割にあたる。なかでも水神前遺跡、大清水遺跡、柿の木遺跡、二夕俣a遺跡は縄文時代早期前半から早期後半までの住居跡の変遷が５期、辿れる遺跡である。

弥生時代の遺跡数は極めて少ない。米沢市内でわずか４か所である。清水北C遺跡は、弥生時代の墓制の一つである再葬墓（さいそうば）が大小含め25基検出されている。さらに、籾痕が認められる土器が出土していることで注目される。

古墳時代になると丘陵や山麓に大小の古墳が築造されるようになる。万世町の比丘尼平（びくにだいら）遺跡では県内初出となる古墳時代前期の方形周溝墓が３基、近接する八幡堂遺跡においても5基確認されている。窪田地区には4世紀後半に属する、東北でも最大級の前方後円墳である寶領塚（ほうりょうづか）古墳をはじめ、八幡塚古墳が存在し、大字浅川には193基の群集墳である戸塚山古墳群などが点在している。置賜地方は古墳造営が全国的に終焉する8世紀代においても牛森古墳などの横穴式石室墓が築造され続けている。集落遺跡としては窪田地区に位置する鎌倉上遺跡がある。前期後半と中期後半の2時期があり、特に中期後半の焼失住居から土師器を中心とした一括資料が出土している。

奈良・平安時代になると平野部の主要な河川に沿って遺跡が広範囲に分布するようになる。

置賜郡は「日本書紀」の持統天皇３（689）年正月三日条に書かれる「陸奥国優嗜雲（うきたむ）郡」にあたるとされ、当初は出羽国ではなく陸奥国の管内であった。その後、和銅5（712）年に出羽国が建てられる。その後、陸奥国から分割され出羽国に編入されたと考えられている。この編入時期や理由については検討の余地がある。奈良・平安時代は郡単位でみると陸奥国から出羽国へ移る過



※「河川流域の縄文景観」小林圭一氏論文中の図15に加筆・修正を行い使用している。

第２図　地形分類図

波期と出羽国置賜郡として存続した安定期の二時期にわけられる。

当該期の注目される遺跡として大浦遺跡・笹原遺跡・木和田地区の竹井境a・b遺跡がある。大浦遺跡は８世紀後半から9世紀前半まで機能していた置賜郡衙跡と推定され、具注暦の漆紙文書や布目瓦が出土している。笹原遺跡からは木簡や墨書土器、円面硯が出土し、竹井境a・b遺跡では竪穴建物30棟、掘立柱建物５棟が検出されている。11世紀になると米沢は成島荘として摂関家の荘園となっている。

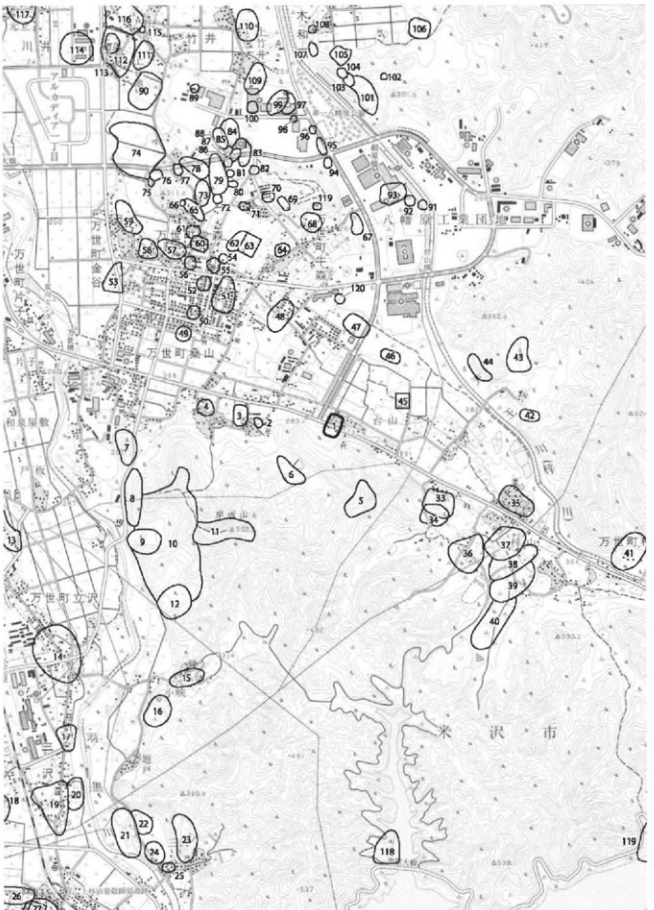
中世にはいると鎌倉期の武将大江広元の次男時広が「長井庄」の地頭として、厨仁元（1238）年、米沢に屋城を構えたとされている。大江氏は長井氏を称し、八代約200年の支配を続けたが、天授6（1380）年に伊達宗遠の侵攻によって置賜を追われ、置賜は伊達領となった。置賜支配の中心は高畠であったが、15代伊達晴宗が当主の時に米沢へ移り、17代伊達政宗の天正18（1590）年に岩出山へ移封になったことにより伊達氏の支配は終焉した。

同天正18(1590)年蒲生氏が奥羽諸大名の抑えとして入部し、慶長３(1598)年には上杉氏が120万石の大大名として会津に入部。それに伴い米沢は上杉氏の重臣である直江兼続の治めるところとなる。上杉氏は1600年の関ヶ原敗戦後、米沢に移されここに米沢藩が成立する。

当該期における遺跡は主に館跡であり、最も古い館跡として12世紀代と推定される木和田遺跡がある。その他に鎌倉期に築城されたと考えられている堂森山館跡や15世紀前後に存在していたと考えられる我妻館跡。また、南北朝時代に築城されたとされる万世館山城跡、早坂山館跡、戦国期に築城されたと考えられる鷲城跡などが旧街道沿いに分布している。

近世は米沢藩上杉家の支配のもと推移していく。当初30万石であった石高が寛永15・16（1638・39）年の検地では実高約51万石とされており、積極的な新田開発が行われていたと考えられる。これは重臣直江兼続によるところが大きい。その後、寛文４（1664）年に15万石に減封され、それにより藩財政は貧窮し、上杉鷹山が明和４(1767)年から改革するまで続くこととなる。その後戊辰戦争の降伏を経て明治４（1871）年に置賜県となり、明治9年には山形県に合併、明治22（1889）年市制が施行され現在に至っている。

今回調査を行った稲荷山館跡には以下のような伝承が残っている。「稲荷山館跡は長井氏家臣の熊坂利右衛門が築城した。伊達氏の侵攻の際に最後まで抵抗したが敗れ、その後に館跡は廃城となった。」このことから伝承を信じれば長井氏が米沢を支配した13世紀前半から伊達氏に敗れる14世紀末の間で築城され、その後、15世紀以降は館跡として機能していなかったといえる。



※国土地理院発行２万５千分の１地形図「米沢東部」使用

第３図　遺跡位置図

表1　遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代
1	都萌山館跡	館	中世・近世
2	山ノ下	集落	縄文
3	堤屋敷	集落	縄文・中世
4	下屋敷	集落	縄文
5	万世館山城	城館	中世
6	普門寺	集落	縄文
7	早坂山ａ	集落	縄文・中世
8	早坂山ｄ	集落	縄文
9	早坂山ｂ	集落・館	縄文・中世
10	鷲城	城館	中世
11	早坂山館	館	中世
12	早坂山ｃ	集落	縄文
13	第五中学校裏	集落	縄文
14	松原	集落	縄文
15	小峡	集落	縄文
16	丸山日景館	館	中世
17	三沢ａ	集落	縄文
18	中島	集落	縄文
19	三沢ｂ	集落	縄文
20	白旗	集落	縄文
21	山崎ｃ	集落	縄文
22	山崎ａ	集落	縄文
23	三沢館	館	中世
24	山崎ｂ	集落	縄文
25	三沢前田下館	館	中世
26	坊中ｂ	集落	縄文・中世
27	喜多（北）館	館	中世
28	坊中ａ	集落	縄文
29	坊中前館	館	中世
30	普門院北	集落	縄文
31	普門院館	館	中世
32	普門院	集落	縄文
33	町在家館	館	中世
34	町在家	散布地？	
35	上窪	集落	縄文
36	梓山ａ	集落	縄文
37	法得寺	集落	縄文
38	梓山ｂ	集落	縄文
39	梓山ｃ	集落	縄文
40	梓山ｄ	集落	縄文
41	生代	集落	縄文・弥生
42	松林寺ｃ	集落	縄文
43	松林寺	集落	縄文
44	松林寺館	館	中世
45	梓山館	館	中世
46	八幡原土壇群	集落・土壇	縄文・中世
47	原ノ上	集落	縄文
48	牛森	集落	縄文
49	小谷地	散布地	縄文
50	水神前	集落	縄文
51	大清水	集落	縄文
52	柿の木	集落	縄文
53	金谷館	館	中世
54	東原塚		
55	ニタ俣ｂ	集落	縄文
56	ニタ俣ａ	集落	縄文
57	八幡堂	集落・墓	縄文・古墳
58	金谷ａ	集落	縄文
59	金谷ｂ	集落	縄文
60	我妻館跡	館	中世・近世
61	前野	散布地	縄文
62	下原田	集落	縄文
63	原田館	館	中世
64	十文字西	集落	中世
65	堂森山館	館	中世
66	堂森山塚ｂ	塚	中世
67	牛山	集落	縄文
68	牛森山南下	集落	平安・中世
69	牛森山塚群	塚群	中世
70	中焼山下	散布地	古墳
71	堂森東	集落	縄文
72	耳取ａ	集落	縄文
73	耳取ｂ	集落	縄文・平安
74	比丘尼平	集落	縄文・古墳
75	堂森山塚ａ	塚	中世
76	比丘尼平廃寺	寺院	中世
77	山影	集落	縄文
78	慶治清水ａ	集落	縄文
79	慶治清水ｂ	集落	縄文
80	慶治清水ｃ	散布地	縄文
81	清水北ａ	散布地	縄文
82	焼山下	集落	縄文
83	清水北ｃ	集落・墓	縄文・弥生
84	八幡原ｂ	集落・墓	縄文・近世
85	八幡原ａ	集落	縄文
86	清水北ｂ	集落	縄文
87	清水北ｄ	集落	縄文・弥生
88	八幡原ｃ	散布地	縄文
89	竹井	集落	縄文・奈良・平安
90	上谷地ａ	集落	縄文
91	牛森古墳	古墳	古墳
92	堀原前川原	散布地	中世
93	堀原ｂ	集落	縄文
94	辻の堂ｂ	散布地	近世
95	辻の堂ａ	散布地	近世
96	長壇	散布地	縄文
97	竹井壇ａ・竹井壇ｂ	集落	縄文・奈良・平安
98	竹井壇ｃ	土壇	中世
99	竹井壇ａ・竹井壇ｂ	集落	縄文・奈良・平安
100	玉ノ木ｂ	集落	奈良・平安
101	横山ｃ	集落	縄文・奈良・平安
102	木和田塚ｃ	塚群	中世
103	横山ｂ	集落	奈良・平安
104	横山ａ	集落	縄文・奈良
105	木和田館	館	中世
106	馬ノ越道館	館	中世
107	木和田塚ｂ	塚群	中世
108	木和田塚ａ	塚	中世
109	竹井	集落	縄文・奈良・平安
110	玉ノ木ａ	集落	奈良・平安
111	上谷地ｄ	集落	縄文
112	上谷地ｂ	集落	縄文
113	上谷地館	館	中世
114	上谷地ｃ	集落	奈良・平安・中世
115	野際塚	塚	中世
116	野際	集落	縄文
117	元立	集落	奈良・平安
118	前ガ沢	集落	縄文
119	牛森山古墳	古墳	古墳
120	井ノ鼻	集落	縄文・中世

Ⅲ　調査の成果

1　遺跡の概要

A　概　　要

今回が第３次調査となる稲荷山館跡は区画施設である土塁と堀を有する一辺が70mほどの方形の館跡である。現在は西辺70m、南辺30mの土塁が目視出来る。付随していたであろう堀跡は宅地のための整地や道を作るために整地されたと考えられ、南側の土塁に面し一条の窪んだ地形を観察するに留まる。

館跡は国道13号の敷設工事によって南北に分断されており館跡中央、主郭であったであろう箇所を国道13号が通っている。国道敷設工事の際に建物の礎石であったと考えられる礫が出土したことが知られている。なお、この工事は盛り土工法によって行われた。そのため、南北で標高約５mの差が生じている。明治44年には南側堀跡の南西隅から外側約30m付近で、地権者が畑地耕作中に甕一杯ぐらいの埋納銭を発見したと伝えられている。

この埋納銭は戦時中の「金属類回収令」によってほとんど現存していないが十数枚は残っているとのことである。宋銭が多いとされている（米沢市遺跡詳細分布調査報告書）。平成８年には米沢市教育委員会が貯水槽建設に伴って70㎡を調査している。検出された遺構は堀跡が２条、柱穴が27基であり、遺物は擂鉢や内耳土鍋の破片を中心として整理箱10箱程出土している。

第１次調査は平成17年度に行われた。東北中央自動車道建設に伴って行われたこの調査は館跡の南辺土塁から南へ約70m離れた山麓を対象とした。郭外ではあるが館跡に付随する施設がないか確認することと、西進する高速道法線内の地下状況を確認する目的で行われた。この時の調査で館跡に関連すると考えられる遺構や遺物は確認されていない。

平成18年には第２次調査として東北中央自動車道建設に伴う工事用道路建設場所約200㎡を対象とし、L字形に現存する堀跡と土塁内部の郭内を主体として約130㎡を精査した。検出された遺構は柱穴10基と土塁及び堀跡である。土塁は断ち割りを実施し堀跡は一部の掘り下げに留まった。遺物は土塁上層から内耳土鍋片24点と擂鉢片２点などが出土している。

今回の調査は第2次調査の北側を含む館跡西側の一部の調査となり土塁及び堀跡も調査区内に含まれる。

なお、表土掘削を行った時点で調査区北側の広い範囲が現代の工事による攪乱を受けていたことを確認できた。攪乱部分を深さ１m程掘削したが地山まで達することがなかった。砕石で埋められており、割れた土管も確認出来た。このことから調査区北側はすでに遺構が破壊され残存していないと判断した。

B　基本層序

土塁に平行するかたちで調査区の中央部分を南北に記録した。１層～３層までが表土、４層は上層に砂が多く堆積していることから標高の高い南側から雨などの影響で流れた土砂が堆積した層と考えられる。５層が旧耕作土、６層が自然堆積層、７層は攪乱層、８層が漸移層で９層が遺構検出面となる。これより下層は黄褐色や褐色を呈したシルト層である。１～４層が耕作を行わなくなり杉が植林された以降の土層。５層が畑地として利用された可能性がある層。６層はその上面において人々の生活が認められる層、８層から９層は1層～7層までと違い固くしまる漸移層及び地山層となる（第９図）。

2　遺　　構

柱　穴（第11・12図）

柱穴は14基検出されている。いずれの柱穴からも遺物の出土はない。これらは円形で直径20～30cm、検出面からの深さ10～70cmである。覆土の堆積から３つのグループに分けられる。抜き取り痕を有するもの、柱痕が明確に判断できるもの、柱穴と考えられるが判然としないもの。以下にこのことについて記す。

①抜き取り痕を有する柱穴（SP５・６・７・10・12・21・26）

このグループの中で明瞭に抜き取りの痕跡を残すのはSP21のみである。他の柱穴で掘り方も含めた明確な痕跡を認めるものはなかった。しかし、SP26以外の柱穴は直径20から30cm程度であるのに対して40から70cmほどの深さを持つ。このことから柱穴の可能性が高く、さらに覆土中に柱根が腐った植物質が見られず、明確な掘り方及び柱痕が確認出来なかったことから柱の抜き取りを行ったものと判断した。抜き取った柱は館跡の内での建て替えに使用したと考えられるが重複した柱穴は確認出来ず、覆土も同一色及び土質も同じであることから時期差が生じる建て替えが行われたとは認められない。推測が許されるのなら廃城になった際、もしくは廃城後に抜き取られたと想像することが出来る。

②柱痕が明確に残る柱穴（SP３・９・11・24・25）

これらは柱痕及び掘り方が明確に残る柱穴である。直径は20cm程度で深さは30から40cmと抜き取り痕がある柱穴と比べ小さい。SP24は土塁SF1を断ち割った断面で確認出来た柱穴である。この柱穴は先に述べた西壁の層序６層の上面から掘りこまれている。土塁SF1が構築される前に掘られた柱穴であり、土塁SF1は西壁層序の６層の上に構築されたことがこのことにより考えられる。また、この柱穴と土塁には時期差があるといえよう。同様に他の柱穴や遺構に関しても土塁との時期差を考える必要があるが、遺構からの遺物出土がなかったため判然としない。なお、６層上面では遺構の検出が難しく、そのため地山直上の８層で検出を行った。柱穴の形態や覆土の堆積の類似から柱痕が見られるこれらの柱穴もSP24同様土塁構築以前に掘られた遺構である可能性がある。

③柱穴と考えられるが判然としない遺構（SP22・23）

この２つは直径30cm程度、検出面からの深さ10cm程の遺構である。断面の覆土堆積状況からいえば中心を柱痕としてその周りを掘り方と考えることも可能である。だが深さが10cm程度と浅いため自然堆積の可能性も否定できない。覆土の土色及び土質は②に近い。

土　坑（第12図）

土坑はSK20のみ検出された。覆土の堆積状況は一見して柱穴の様にも見えるが覆土内の混入物には未分解の木片があり、土のしまりが緩い状態であった。このことからこの土坑は表土掘削時の抜根が原因で出来たものか、もしくは現代の開発による攪乱と考えられる。

井戸（第12図）

素掘りの井戸と考えられるSE13が検出された。平面形は円形で直径約90cm、検出面からの深さも同様に約90cmである。当初、検出面とした面では明確なプラン検出が出来なかったため、周辺を2cm程下げプランを検出した。この検出面を下げている際に内耳土鍋の破片が出土している。西壁の層序でいえば当初検出面と設定したのが８層の若干上層に当たる。内耳土鍋は５層もしくは６層中からの出土と考えられるが、付近に杉の木の根があり、攪乱を受けた可能性があるため詳細は不明である。SE13から遺物は出土していない。そのため構築年代は判断できない。ただし、館跡内での水の確保は必要であったと考えられるうえに西壁の6層が堆積する前後での構築であると考えられることから館跡で使用された井戸だと考えても良いであろう。

土塁SF1と堀跡SD2（第９～10図）

土塁SF1は検出面から最高部までで1.8mを計り横断面の幅は６mを計る。土塁本来の構築層は22層～28層で35層が西壁の６層にあたり、土塁構築以前の層となる。36層が西壁の８層にあたる。そのため実際の土塁の高さは1.4m程となる。構築方法は土塁に面し、掘削した堀の残土を使用したと考えられる。土塁下部の土質が西壁でみられる上層の黒色シルトを基本としており、土塁上部にかけて同壁に見られる褐色シルトやその下層の土質である黄褐色のシルトを多く含む。なお、第２次調査で報告されているような版築を行った形跡は確認出来なかった。土のしまりが緩いことも考慮すると構築方法は堀跡を掘削した土を土塁構築箇所に置き、ある程度均す、その際に堀側に土が崩れ落ちないように若干の盛り上がりを構築する。その後また土を盛り均すという行為を繰り返し、最終的に22～24層にあたる土を盛り形を整えたと考えられる。なお、堀側に土が崩落しないように盛り上がりを作成したとすれば上部へ堀から直接に土を載せることは難しくなるため、一度郭内に土を運び込み館跡内部から構築した可能性もある。形状で注目されるのは上部の凹みである。郭内の人間が見張りや敵への攻撃のために足場としたと考えられる。区画施設も勿

論であるが防御施設の側面が窺い知れる。

堀跡SD2は幅が５m、深さが0.7mを計る。この数値は表土や整地層を除いたものである。表土・整地層も含めると深さ約1.1mを計る。堀の構築時期は土塁構築時と同じであろうが出土した遺物は近世の陶磁器を主としたものであった。出土遺物の取り上げと層位については第Ⅰ章第２節を参照願いたい。

以下に遺物の取り上げを行った層順にて覆土の説明をする。

Ⅰ層の堆積時期は明治期の遺物が出土していることから明治以降の堆積と考えられるが、Ⅱ層で昭和初期に含まれる遺物が出土しているためⅠ層はそれ以降現代に堆積及び整地された層であることがいえる。

Ⅱ層は昭和初期を上限として下層のⅢ層出土遺物が19世紀の年代を中心としていることから19世紀以降昭和初期まで開口していたと考えられる。覆土の状態が未分解の植物質を含むこと、あわせて泥が堆積していることから水の流れの無い状態での堆積であるといえる。

Ⅲ層は17世紀から19世紀にかけての遺物が出土している。但し多く出土しているのは19世紀の遺物であり、17世紀中に帰属される遺物（第18図61）は質が良いため伝世品である可能性が高い。このことから幕末期頃に堆積した層と考えられる。覆土中に砂を若干含むことから、この時期は多少の水の流れがあったと考えられる。

Ⅳ層からは遺物の出土がない。覆土の状況から自然堆積層で底砂が確認出来ることから水の影響が窺える。土色及び土質からⅢ層とは長期間の時期差を窺うことが出来る。底部に泥の堆積が認められず底砂が薄く堆積していただけであった。いつの時期からかは判断がつかないが、19世紀以前に当地で暮らしていた人々が堀を掃除しながら使用していた可能性がある。近隣の方から昔は水の流れがあり、２m程度の幅があった。洗濯などに使用していたと伺っている。なお、中世に属する遺物の出土はない。堀の掃除の度に失われていったと考えられる。

3　遺　　物

今回の調査で出土した遺物のほとんどが堀跡SD2から出土した。主となる遺物は近世の陶磁器類である。その他は遺構外出土遺物で内耳土鍋や凹石などが出土している。

凹石（第21図96）は礫が集中して検出された地点で出土した。遺構の可能性も考えられたが石の出土状況から人為的に配置したという状態ではなく、また、周囲の断ち割りでは土のしまりが弱いことが確認できた。そのことから近世以降畑地の開墾の際に礫が邪魔になり一括で集め捨てられた跡と判断した。

堀跡SD2出土遺物（第13～20図）

先に記したように堀跡SD2出土遺物は覆土をⅠ～Ⅳ層にわけ層毎の取り上げを行った。なお、Ⅳ層からの遺物出土はない。以下層ごとに記す。

Ⅰ層から出土した遺物は２から４になる。出土遺物の年代は17世紀から明治期までと幅がある。これは出土層が整地層であったことから生じたといえる。肥前陶器の呉器手（２）等が出土している。またⅠ層出土遺物とⅡ層出土遺物が接合している。Ⅱ層は堀跡の覆土である。Ⅰ層の整地層出土遺物と接合するということは堀跡近辺の土を用い整地したと考えられる。

Ⅱ層出土の遺物は陶磁器が主であり、他に金属製品として古銭41～47、刀子とみられるもの35、37、釘36が出土している。古銭は腐食により文字が判読できないものがある。判読できるものの多くは「寛永通宝」であり、数枚重ねた状態で廃棄されているものもあった。土器も出土している。29、30は「かわらけ」である。29が口縁部、30が底部である。いずれも小さい破片であるため年代等は不明である。石製品として凹石40と砥石34が出土している。40は風化によりその形状を留めていない。34は磨り傷と材質（恐らく砂岩）により砥石と判断したが断面が薄く、別の用途に用いた道具の可能性がある。その他にはガラス製品として31と33が出土している。31が薬剤などの瓶の蓋、33が玩具と思われる遺物で、形状から拳銃・水鉄砲の柄の部分と判断した。陶磁器の出土量はこの層が最も多く、産地も在地系、肥前、肥前系、瀬戸美濃や会津本郷焼、大堀相馬焼など種類が多い。７は会津本郷焼の皿で高台外側の面取りと高台内部に残る４か所のハリ目跡、胎土から産地を判断した。14は大堀相馬焼と考えられる、灰釉の腰折碗である。外面半分が熱を受けたと考えらる。釉薬の光沢が失われ、泡立ちがみられる。図面には被熱箇所を破線にて示した。高台内部には漆で書かれた「一」

の文字が見え、墨によって底部中央に印がされている。何の目的で行われた作業かは不明である。なお、漆による「一」を書いた陶器が３点あり、いずれも大堀相馬焼と考えられる。１と60がそれにあたる。１は碗に近い鉢で60は14と同じ形状の腰折碗である。共通点は同じ産地であろうことのみである。17は肥前の波佐見で焼かれた磁器碗であり、コンニャク印判で文様が施されている。瀬戸美濃の染付磁器も見られ、それらは明治から大正までに焼かれたものとみられる。これらⅡ層出土の遺物の主体年代は幕末から明治と言える。Ⅱ層出土遺物とⅢ層出土遺物が接合したものに50～52がある。いずれも19世紀に焼かれた染付磁器である。

Ⅲ層出土遺物は陶磁器を主とし、他に砥石65や火打ち石の原石66が出土している。陶磁器類は肥前系とした64の瓶と61の青磁の香炉以外、在地か近県に存在する窯跡の所産であるのが特徴といえる。年代は61以外18世紀から19世紀の範囲である。61は17世紀に焼かれたと考えられる青磁の香炉である。器種は皿が多く碗は少ない。植木鉢と考えられる63は米沢市内にあった成島焼の所産である。

その他に層位を確認出来なかった遺物をＳＤ２とし、一括で扱った。その中身はⅠ層からⅢ層まで出土している遺物と大差はない。年代も17世紀から近現代までと一致している。

遺構外出土遺物（第21図）

ほとんどが内耳土鍋の破片である。面整理や遺構検出作業中に出土した。遺物観察表の出土位置に表土と記載されているものの殆どがこれにあたる。

すべて破片資料であり87、88、91、94は口縁を残す。88は内耳が接続されていた箇所で根元から破損している。94は水の影響か表面が磨滅している。

体部の破片は90、93である。90は体部内面の下側の内耳部分の接続部を有す。93は上下共に輪積み部分から破損しており、内外面刷毛目調整が施されている。

89、95は体部から底部にかけての破片である。内外面とも刷毛目調整が施される。93も含め刷毛目調整は横方向へ行っている。なお、体部と底部の破損は粘土のつなぎ目で起こっている。また95は外面全体に煤が付着している。

92は土器で形状は小型の壺か鉢だと考えられるが詳細は不明である。体部から底部にかけての破片で、破損部は輪積み箇所からの剥離である。内外面とも刷毛目調整が施されているが外面が横方向への調整であるのに対し内面は縦方向への調整である。なお、内面・外面ともに水の影響であろうか磨滅している。

96は両面に直径5cm程のくぼみが見られる。用途は不明である。この遺物は先ほど記載した通り礫が一括廃棄されたと考えられる箇所で出土した。

97は石臼である。面整理や遺構検出を行っている際に出土した遺物であり検出面上層の西壁６層中で出土した。内外面とも磨滅が激しく擦り溝をはっきりと確認することが出来ない。石臼の上面（内面）に多くの煤が付着している(写真図版16)。二次利用として火鉢などに使用された可能性がある。

98はウィスキーの瓶である。調査区北側の攪乱部分から出土した。このことから昭和の段階で受けた攪乱であることが分かる。

4　小　　結

出土遺物の年代や遺構や土層の状況などから廃城後の土地の利用が土塁内部と外で違うことが判明した。

土塁内部は畑の開拓や植林された杉などの影響で一部の遺構面は破壊されている。しかしそれ以外で人々の生活の影響をほとんど受けなかったといって良い。遺構の保存状態も良いと思われる。これは基本層序とした西壁の断面で確認した黒色土層が調査区全面に広がっていたことからも推測される。その上で遺物数が少ないのが特徴である。

土塁の外側にある堀跡の覆土には近世の陶磁器を中心に比較的新しい時代の遺物が多く含まれていた。これは今回調査した堀跡に限って言えば、廃城後、埋め戻されることなく近世まで使用されてきたことを意味し、常に人々の生活の影響があったといえる。もちろん、使用の断絶期間はあったであろう。だが、近世より古い段階の遺物及び堆積層が確認出来なかったことも考慮するとある程度の頻度で堀の掃除をしていたと考えられ、継続して付近に人が住み、堀を活用していたことが考えられる。

表2　遺物観察表（1）

＊長さ・幅・厚さの単位はミリメートルである。また、（ ）内の値は、復元による推定値を示す。

遺物番号	図版	写真図版	種類	残存率	器種・形状	破片部位	産地・焼元	文様
1	13	8・9	陶器	1/2	鉢		大堀相馬焼？	
2	13	8・9	陶器	1/2	碗（呉器手）		肥前？	
3	13	14・15	染付磁器	4/5	小碗		瀬戸美濃	唐子、環帯文
4	13	12・13	染付磁器	3/4	皿		肥前系	月見の風景、詩が一首書かれている。
5	13	17	陶器	破片	土管		不明	
6	14	8・9	陶器	1/4	皿		会津本郷焼？	五弁花
7	14	12・13	砂石手	1/2	皿		会津本郷焼	草花文
8	14	8・9	染付磁器	1/4	皿		在地	
9	14	12・13	染付磁器	ほぼ完形	皿		肥前系	団扇、蝙蝠、灯篭
10	14	8・9	陶器	ほぼ完形	皿		在地？	五弁花
11	14	8・9	陶器	ほぼ完形	皿		在地	松葉
12	14	12・13	磁器	2/3	変形皿		肥前	
13	14	8・9	陶器	2/3	端反碗		大堀相馬焼（？）	
14	14	8・9	陶器	ほぼ完形	腰折碗		大堀相馬焼？	
15	14	12・13	染付磁器	2/5	碗		在地（平清水？）	草花文、切込め
16	14	12・13	染付磁器	1/2	碗		在地	竹
17	15	11	染付磁器	破片	碗	底部	波佐見	底部高台内に「大明年製」の一部
18	15	12・13	染付磁器	ほぼ完形	碗		瀬戸美濃	梅
19	15	12・13	染付磁器	1/6	碗		瀬戸美濃	文字印
20	15	12・13	染付磁器	3/4	碗		瀬戸美濃	菊、蔓
21	15	14・15	染付磁器	1/2	小坏		瀬戸美濃	梅、蝙蝠？
22	15	14・15	染付磁器	1/2	小坏		瀬戸美濃系	見込：松、月
23	15	14・15	染付磁器	3/5	小坏		在地	草花文
24	15	14・15	染付磁器	4/5	小坏		瀬戸	麦
25	15	11	染付磁器	破片	花瓶？	体部から底部	肥前系？	草花文
26	15	11	染付磁器	破片	鉢	体部から口縁	肥前系	
27	15	11	染付磁器	3/4	蓋		不明	草花文
28	16		陶器	破片	平仄	脚部	在地？	
29	16	16	土器	破片	かわらけ	口縁部		
30	16	16	土器	破片	かわらけ	底部		
31	16	16	ガラス		瓶（薬）			
32	16	10	陶器	破片	急須？	口縁から体部	不明	
33	16	17	ガラス		玩具	玩具の準鉄の柄		
34	16	16	石製品		砥石？			
35	16	17	金属製品		刀子か？			
36	16	17	金属製品		釘			
37	16	17	金属製品		刀子か？			
38	16	14・15	陶器	1/5	擂鉢		成島焼（系）	
39	16	10	陶器？	1/6	土瓶	体部から口縁	大堀相馬焼	鳥
40	16	17	石製品		凹石か？			
41	17		金属製品		古銭			
42	17	17	金属製品		古銭			
43	17	17	金属製品		古銭			
44	17	17	金属製品		古銭			
45	17	17	金属製品		古銭			
46	17		金属製品		古銭			
47	17	17	金属製品		古銭			
48	17	12・13	染付磁器	1/2	皿		産地不明	外面：源氏香文、見込：蘭、梅？
49	17	12・13	染付磁器	破片	皿	口縁	在地	見込：竹ほか
50	17	12・13	染付磁器	3/4	皿		肥前系	雪輪草花文

表3　遺物観察表（2）

出土位置	年代	計測値 (mm)	特記事項
SD2(FⅠ)・SD2(FⅡ)	19 c	口径 136/底径 79/器高 71	体部外面から鋭角な物で叩き割った痕跡。「一」の字あり。
SD2(FⅠ)	17 c 後 ～ 18 c 前	口径 (111)/底径 47/器高 81	
SD2(FⅠ)	明治	口径 81/底径 36/器高 43	高台底部に砂付着。銅版転写。
SD2(FⅠ)	明治初期	口径 121/底径 75/器高 21.5	蛇の目高台、口紅。
SD2(FⅠ)・SD2(FⅡ)			木枠を用いて成形か？釉薬は使用していない。
SD2(FⅡ)	19 c	口径 (100)/底径 (44)/器高 27	見込内部にハリ目跡１か所。
SD2(FⅡ)	19 c 初	口径 (100)/底径 44/器高 27	底部高台内と見込内にそれぞれハリ目跡４か所。
SD2(FⅡ)	明治初め	口径 (94)/底径 (42)/器高２４	見込内部にハリ目跡１か所。
SD2(FⅡ)	19 c	口径 90/底径 58.5/器高 22	蛇の目高台。
SD2(FⅡ)	19c 以降	口径 109/底径 50/器高 32.5	
SD2(FⅡ)	19 c	口径 94/底径 38/器高 26.5	見込内面にハリ目跡３カ所
SD2(FⅡ)	19 c	底部：長軸 53,短軸 31/器高 22	型打ち整形、型紙刷。
SD2(FⅡ)	19 c 前葉	口径 93/底径 37/器高 49.5	割れ口に接着剤として漆が付着。
SD2(FⅡ)	18 c 末～ 19 c 初	口径 96/底径 40/器高 49	60 と同形状。底部、高台内に墨にて「一」の字あり。墨跡あり。
SD2(FⅡ)	19 c 後	口径 (102)/底径 40/器高 60	底部高台部、外側を面取り。鋭角な物で叩き割った痕跡。
SD2(FⅡ)	19 c 後葉	口径 110/底径 40/器高 59	見込みにハリ目跡２カ所。完形であれば推定４か所。51 と同形状。
SD2(FⅡ)	18 c	残器高 18.5	二次被熱を受けている。
SD2(FⅡ)	明治～	口径 118/底径 41/器高 52.5	銅版転写、３色刷り。
SD2(FⅡ)	明治・大正	口径 (111)/底径 (36)/器高 45	銅版転写
SD2(FⅡ)	明治～	口径 (118)/底径 41/器高 62	銅版転写、２色刷り。
SD2(FⅡ)	明治	口径 (73)/底径 30/器高 50	底部高台内に文字有。
SD2(FⅡ)	明治～大正	口径 (57)/底径 24.5/器高 27.5	コバルト。
SD2(FⅡ)	明治以降	口径 72/底径 27/器高 44	一珍技法？
SD2(FⅡ)	近代・現代	口径 63/底径 32/器高 51	見込に屋号と「醤油」（字）
SD2(FⅡ)	明治	底径 68/残器高 116	胎土に黒い粒を含む。底部外面を面取り。
SD2(FⅡ)	19 c	口径 (156)/残器高 62.1	外面、若干の被熱。
SD2(FⅡ)	明治以降	口径 52/器高 19	
SD2(FⅡ)	不明	底径 (52)/残器高 24	外面被熱。回転糸切。
SD2(FⅡ)			
SD2(FⅡ)			
SD2(FⅡ)		直径（つば）50/高さ 34.5	
SD2(FⅡ)	近代以降	口径 (50)/底径 (82)/残器高 32.8	体部外面に「米穀」の文字あり。
SD2(FⅡ)		長軸 46/厚さ 14	
SD2(FⅡ)		長軸 84/厚さ 3	
SD2(FⅡ)		長さ 61/ 幅 10/厚さ 5	
SD2(FⅡ)		長さ 88/ 幅 6/ 厚さ 7	
SD2(FⅡ)		長さ 93/ 幅 24/厚さ 7	
SD2(FⅡ)	18 c ～ 19 c	底径 123/残器高 85	底部外面、中央に竹筒による押印有。
SD2(FⅡ)	19 c	口径 (62)/残器高 150	口縁部、無釉
SD2(FⅡ)		長径 91/短径 75/厚さ 20.5	
SD2(FⅡ)		直径 23	寛永通宝：複数枚
SD2(FⅡ)		直径 24	寛永通宝：２枚
SD2(FⅡ)		直径 24	寛永通宝？１枚
SD2(FⅡ)		直径 22	寛永通宝？２枚重なり
SD2(FⅡ)		直径 24	寛永通宝？１枚
SD2(FⅡ)		直径 25	寛永通宝：複数枚
SD2(FⅡ)		直径 24	寛永通宝：１枚
SD2・SD2(FⅡ)	明治初め	口径 99.5/底径 54/器高 22.5	
SD2・SD2(FⅡ)	19 c 後	残器高 29	
SD2・SD2(FⅡ)	19 c	口径 137/底径 92/器高 35	蛇の目高台。

表4　遺物観察表（3）

遺物番号	図版	写真図版	種類	残存率	器種・形状	破片部位	産地・焼元	文様
51	17	12・13	染付磁器	2/5	碗		在地	竹
52	17	12・13	染付磁器	1/2	皿		不明	帝字・梅・菱形
53	17	10	陶器	2/5	小壺		在地	
54	18	14・15	陶器	破片	擂鉢	口縁部から体部	成島焼（系）	
55	18	10	陶器	1/3	玉縁の鉢		在地	
56	18	12・13	磁器	破片	皿	口縁	不明	
57	18	8・9	磁器		皿		不明	
58	18	8・9	陶器	1/3	皿		在地	
59	18	8・9	陶器	1/5	皿		相馬？	山水
60	18	8・9	陶器	1/2	腰折碗		大堀相馬焼（？）	
61	18	11	青磁	4/5	香炉		肥前	
62	18	10	陶器	破片	土瓶か急須	口縁から体部	大堀相馬焼か？	草花文
63	19	14・15	陶器	破片	植木鉢	体部から口縁	成島焼（系）	
64	19	11	染付磁器		瓶		肥前系	竹、梅
65	19	16	石製品		砥石			
66	19	16	石製品		火打ち石（原石）			
67	19	14・15	陶器		擂鉢	底部	成島焼（系）	
68	19	17	金属製品		刀子か？			
69	19	16	石製品		火打ち石			
70	19		陶器	3/4	平仄		在地	
71	19	11	青磁染付	破片	香炉	脚部	産地不明	
72	19	12・13	磁器		皿		不明	
73	19	10	陶器	破片	小鉢	口縁（取っ手部分）	不明	
74	19	17	石製品		凹石か？			
75	20	14・15	染付磁器	1/3	小坏		肥前系？	草花文
76	20	14・15	染付磁器	2/3	小坏		在地	富士山
77	20	14・15	染付磁器	破片	小坏か碗？	口縁から体部	肥前系	松
78	20	11	染付磁器	破片	筒型碗	体部から口縁	肥前系	外面：格子割蜀、見込：四方襷
79	20	12・13	染付磁器	1/2	碗		肥前（波佐見）	楓文
80	20	12・13	染付磁器	1/3	碗		不明	梅か？
81	20	8・9	磁器	1/2	碗		不明	草花文
82	20	8・9	陶器	破片	碗	口縁から体部	相馬？	
83	20	12・13	染付磁器	1/3	碗		在地（平清水？）	草花文、切込
84	20	10	陶器	2/3	鉢		在地	
85	20	12・13	染付磁器	1/2	皿		肥前	外面：唐草、見込：扇、五弁花、底部：渦福
86	20	8・9	陶器	ほぼ完形	皿		大堀相馬？	竹
87	21	16	土器	破片	内耳土鍋？	体部		
88	21	16	土器	破片	内耳土鍋	口縁部		
89	21	16	土器	破片	内耳土鍋	底部から体部		
90	21	16	土器	破片	内耳土鍋	口縁部		
91	21	16	土器	破片	内耳土鍋	口縁部		
92	21	16	土器	破片	不明	体部から底部		
93	21	16	土器	破片	内耳土鍋	体部		
94	21	16	土器	破片	内耳土鍋	口縁部		
95	21	16	土器	破片	土鍋	体部		
96	21	17	石製品		凹石か？			
97	21	16	石製品		石臼			
98	21	17	ガラス	完形	ウィスキー瓶			

表5　遺物観察表（4）

出土位置	年代	計測値	特記事項
SD2(FⅡ)・SD2(FⅢ)	19ｃ	口径(112.5)/底径(48)/器高 60	見込にハリ目跡２カ所有。完形なら推定４カ所。16と同形状。
SD2(FⅡ)・SD2(FⅢ)	19ｃ？	口径 127/底径 72/器高 26	口縁、銅版転写。体部中心付近を見込側からの割った痕跡あり。
SD2(FⅡ)・SD2(FⅢ)	19ｃ	底径 37/残器高 60	
SD2・SD2(FⅢ)	18ｃ～19ｃ	口径(314)/残器高 146.5	
SD2・SD2(FⅢ)	19ｃ	口径 200/底径 (96)/器高 116	成島焼の鉢に形状は似る。
SD2(FⅢ)	18ｃ	残器高 23	墨ハジキ技法
SD2(FⅢ)	19ｃ	底径 (52)/残器高 16	
SD2(FⅢ)	19ｃ	口径 (94)/底径 (37)/器高 23	
SD2(FⅢ)	19ｃ（近世中）	口径 (93)/底径 29/器高 22	
SD2(FⅢ)	18ｃ末～19ｃ初	口径 91/底径 34/器高 42.5	14と同形状。灰釉、底部外面に漆にて「一」の字あり。
SD2(FⅢ)	17c	口径 95.5/底径 40/器高 49	伝世品か？
SD2(FⅢ)	19ｃ前～中	口径 (74)/残器高 27.5	
SD2(FⅢ)	18ｃ～19ｃ	底径 108/残器高 86	外面：鉄釉
SD2(FⅢ)	18ｃ～19ｃ	底径 49/残器高 70.5	高台底に砂が付着
SD2(FⅢ)		長軸 89.5/短軸 42/厚さ 18	
SD2(FⅢ)		長軸 70/短軸 42/厚さ 24	加工なし
SD2(FⅢ)	18ｃ～19ｃ	底径 106/器高 50	
SD2		長さ 107/幅 21/厚さ 17	
SD2		長軸 27.5/短軸 13/厚さ 12.5	
SD2	不明	口径 (56)/底径 46/器高 56	底部に穿孔あり。回転糸切。
SD2	近世？	残器高 25	
SD2	近・現代以降	底径 (100)/器高 24.1	
SD2	19ｃ～	口径 (161)/残器高 53	
SD2		長軸 74/厚さ 24	用途不明
SD2	幕末	口径 (64)/底径 33/器高 46.1	見込に釉薬のただれ有。被熱によるか？
SD2	幕末・明治	口径 64/底径 30/器高 41.5	
SD2	18ｃ	口径 (35)/残器高 30.5	外面、二次被熱。
SD2	18ｃ末～19ｃ初	口径 (69)/残器高 43	割れ口に接着剤として漆が付着。
SD2	18ｃ～19ｃ	口径 99/底径 38/器高 52	高台底に砂が付着。コンニャク印判。
SD2	明治 20年以降	口径 (93)/底径 (30)/器高 46	型紙転写、見込に目跡２つ。完形であれば推定４カ所。
SD2	近代以降	口径 (112)/底径 39/器高 59	
SD2	幕末	口径 (106)/残器高 39	
SD2	19ｃ	口径 (100)/底径 (38)/残器高 50.1	外面から鋭角な物で叩き割った痕跡。15と同形状か？
SD2	19ｃ	口径 220/底径 98/器高 52	
SD2	18ｃ	口径 134.5/底径 76/器高 40	口縁及び高台底に砂付着
SD2	19ｃ前・中葉	口径 115/底径 46/器高 36	灰釉。
遺構検出面	中世		93と同位置で出土。内耳接続部。
Ｐ3（座標名）	中世		内耳接続部
表採	中世		外面煤付着。
表土	中世		
表土	中世		
表土			内面：刷毛目調整。
Ｐ1（座標名）	中世		87と同位置で出土
Ｐ2（座標名）	中世		内面：内耳接続部の痕跡。
遺構検出面	中世		外面煤付着。
Q211（座標名）		高さ 230/幅 215/厚さ 62.5	
表土		直径 (314)/高さ 118.5	
攪乱上面	現代	口径 22/底径 64.5/器高 153	トリス

Ⅳ 理化学分析

AMS測定による放射性炭素年代

（株）加速器分析研究所

A 測定対象試料

稲荷山館跡（第３次調査区）は、山形県米沢市万世町桴山に所在する。測定対象試料は、SD2のⅢ層出土木炭（１：IAAA-120565）１点である（表６）。

遺構は土塁に面する堀跡で、構築年代は14世紀頃とされる。埋没年代については、同様の層から出土した陶磁器のほとんどが近世に属するため、その付近と考えられている。この層は未分解の植物を含む黒色シルト層で、木炭１もここから採取された。

B 測定の意義

遺構の埋没年代を考える助けとする。

C 化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表６に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

D 測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E 算出方法

（１）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表６）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表６に、補正していない値を参考値として表７に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表６に、補正していない値を参考値として表７に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは

２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表７に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

F　測定結果

SD2のⅢ層出土木炭１の^{14}C年代は120±20yrBP、暦年較正年代（１σ）は1689～1926cal　ADの間に５つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は70％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

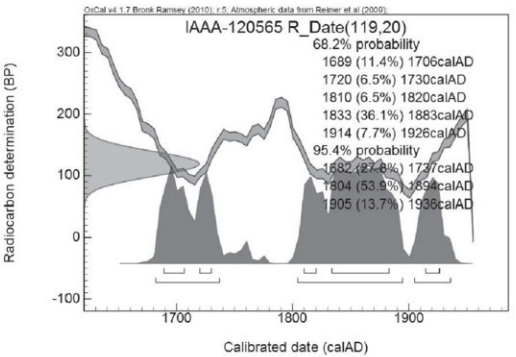
表６　測定試料及び処理

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-120565	1	遺構：SD2 層位：Ⅲ層	木炭	AAA	-24.15 ± 0.34	120 ± 20	98.52 ± 0.26

［#5180］

表７　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)	(yrBP)		
IAAA-120565	110 ± 20	98.69 ± 0.25	119 ± 20	1689calAD - 1706calAD (11.4%) 1720calAD - 1730calAD (6.5%) 1810calAD - 1820calAD (6.5%) 1833calAD - 1883calAD (36.1%) 1914calAD - 1926calAD (7.7%)	1682calAD - 1737calAD (27.8%) 1804calAD - 1894calAD (53.9%) 1905calAD - 1936calAD (13.7%)



第４図 暦年較正結果

文献
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

V 総　括

第１次調査、第２次調査も含めた総括を行う。稲荷山館跡は南側には外部施設を伴わない土塁と堀で囲まれた館跡である。南から北にかけて傾斜している。東、西、北方向に外部施設が存在していたかは不明である。稲荷山館跡の南側を通っていたとされる街道は「明神峠道」であり、この街道周辺には多くの館跡が存在している。重要な街道であったことが窺える。国道13号により館跡は南北に分断されている。なお主郭部分は同国道の敷設工事により破壊された可能性がある。だが、工事工法は盛り土によるものであったということから遺構面が保護されている可能性を否定することは出来ない。工事の際には建物の礎石などが出土したという話が伝わっている。

第２次調査、第３次調査も含め、平成８年に行われた米沢市教育委員会の調査も国道沿い南側の館跡内部であり、国道が通っている箇所が主郭であるなら主郭の若干南にあたる。米沢市教育委員会の調査では多くの柱穴や溝跡が確認されている。遺物では内耳土鍋が多く出土している。埋蔵文化財センターで調査した第２次、第３次調査の遺構数と遺物数とに比べて米沢市教育委員会で調査した区域の方がいずれも多い。詳細な調査区域が判別出来ないのは残念であるが、現在の貯水槽の位置からすれば第３次調査区の東側にあたる。人々の生活域もその周辺にあったと考えられる。第2次調査、第３次調査とも土塁も含めた郭内においては中心より外側に位置する箇所であったために建物跡が確認出来なかったと考えられる。なお、第３次調査で調査区中央南側付近において柱穴が集中している箇所を検出している。さらに井戸跡も検出している。この場所から南辺土塁との間に何らかの建物跡が存在していると考えられる。

土塁の調査は第２次調査に続いて第３次調査でも行った。第２次調査では土塁南辺を調査し、第３次調査では土塁西辺を調査した。南辺土塁は版築工法で築かれ、西側については土を均しながら順々に盛っていく工法で築かれていた。土塁構築に用いた土はいずれも堀跡掘削時に出た残土である。堀跡についても第２次調査、第３次調査で調査を行った。但し、第２次調査の段階では堀跡の土塁側一部を掘削したのみで終了している。第３次調査では堀跡の横断面を確認した。遺物は近世陶磁器が主として出土している。ごく最近まで生活の中で利用されてきたことを現地の方からお聞きした。掃除などをしながら使用してきたと考えられる。南辺に位置する堀跡は杉林の中に位置し開発を受けた形跡が見られないため、廃城時の形状を保っている可能性がある。水堀か空堀かについては調査で判然としなかった。推測では水堀である。近隣の住宅では現在でも堀跡を利用し水を引いている。さらに山裾に位置するため、山からの流水が自然に堀へ集まったと考えられるからである。

第２次調査、第３次調査とも中世に属する遺物数は少なく、属するのは内耳土鍋のみである。第２次調査では土塁と堀跡から出土している。破片であるため詳しい年代は不明である。

最後となったが伝承を肯定する資料は今のところ確認されていない。遺物の点でも年代が分かっているもので米沢市教育委員会が調査した際に出土した16世紀代の内耳土鍋である。当館跡を調査した際には必ず内耳土鍋が出土している。現在のところ年代を明確に判断するのは難しく館跡の存続年代を決めることは今のところ困難である。その上で館跡が廃城となったと考えられる14世紀以降の内耳土鍋が出土していることは興味深い。廃城になったのちも何らかの活用がされていたのか、あるいは廃城にはならず使用され続けていたのかもしれない。伝承も含み、今後の調査によって当館跡の存続期間等が解明することに期待する。

引用・参考文献

財団法人山形県埋蔵文化財センター　2006　『稲荷山館跡・堤屋敷遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第156集

財団法人山形県埋蔵文化財センター　2008　『山ノ下遺跡・稲荷山館跡第２次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第169集

財団法人山形県埋蔵文化財センター　2009　『中山城跡第1・2次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第178集

財団法人山形県埋蔵文化財センター　2012　『堤屋敷遺跡第2次・下屋敷遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第203集

米沢市教育委員会　1996『遺跡詳細分布調査報告書第10集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第54集

江戸遺跡研究会　1999　江戸遺跡研究会第12回大会『江戸の物流‐陶磁器・漆器・瓦から‐』

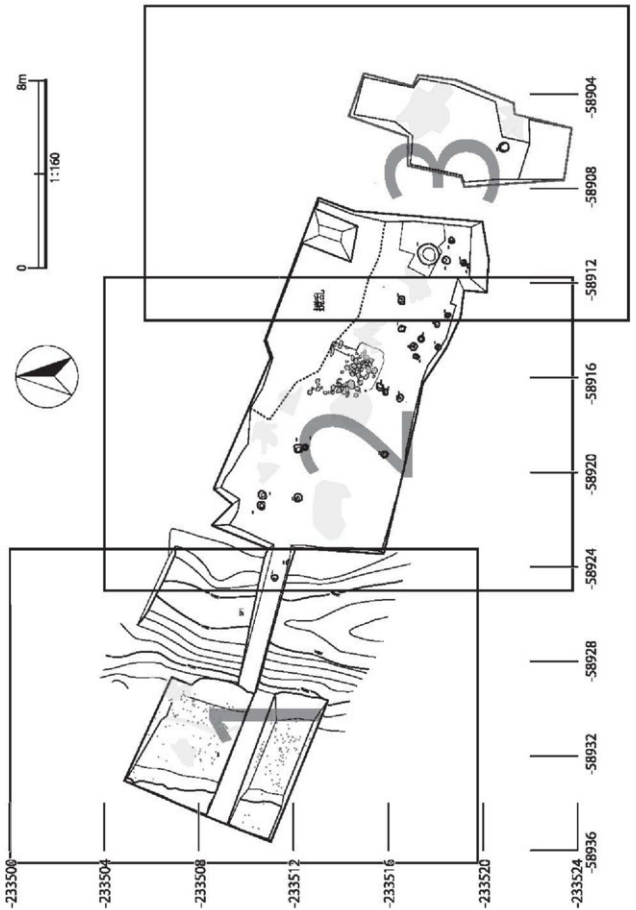
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994『東北大学埋蔵文化財調査年報7』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998『東北大学埋蔵文化財調査年報9』

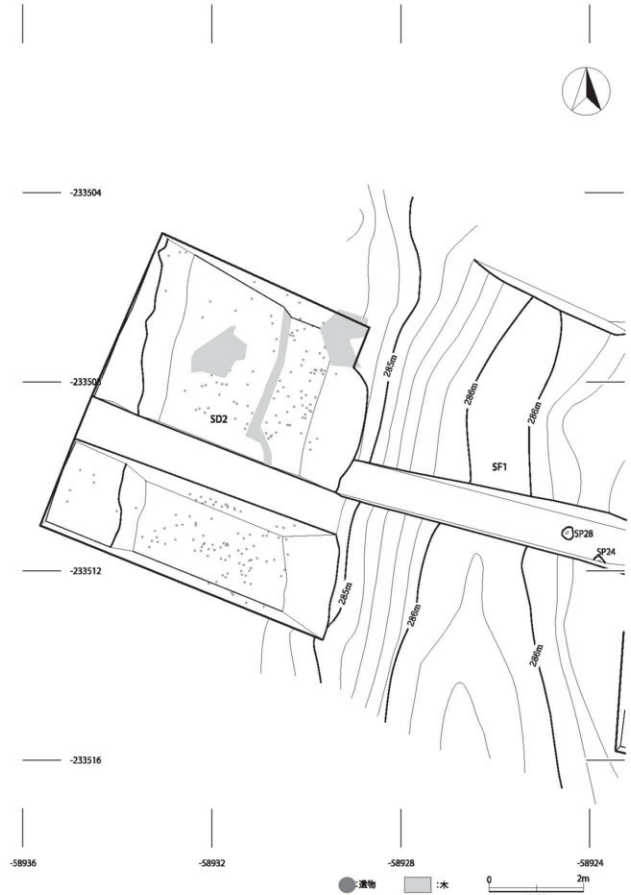
高桑登　2003「４　内耳土鍋」『中世奥羽の土器・陶磁器』p.87～p.94高志書院

高橋哲　2008「山形県米沢市成島の近世窯業の研究」『米沢史学』第24号　p.32～p.61山形県立米沢女子短期大学米沢史学

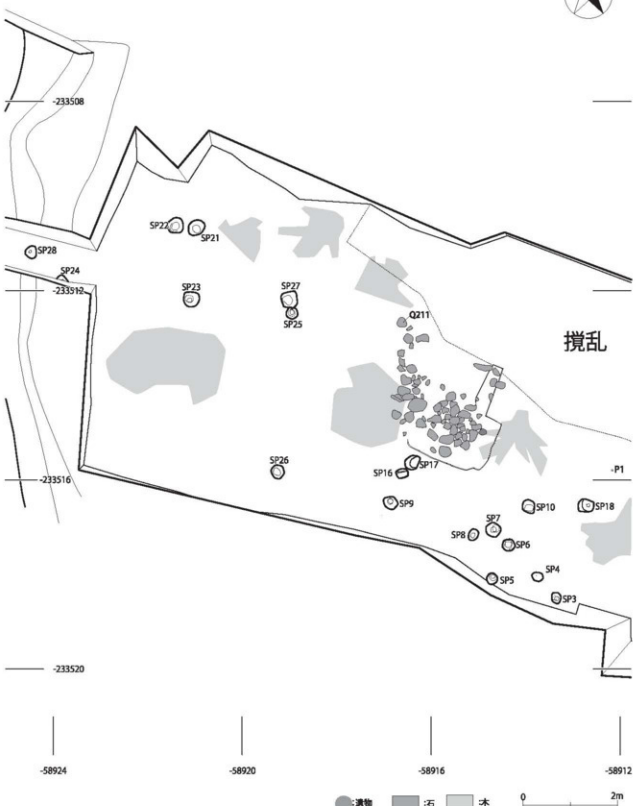
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』



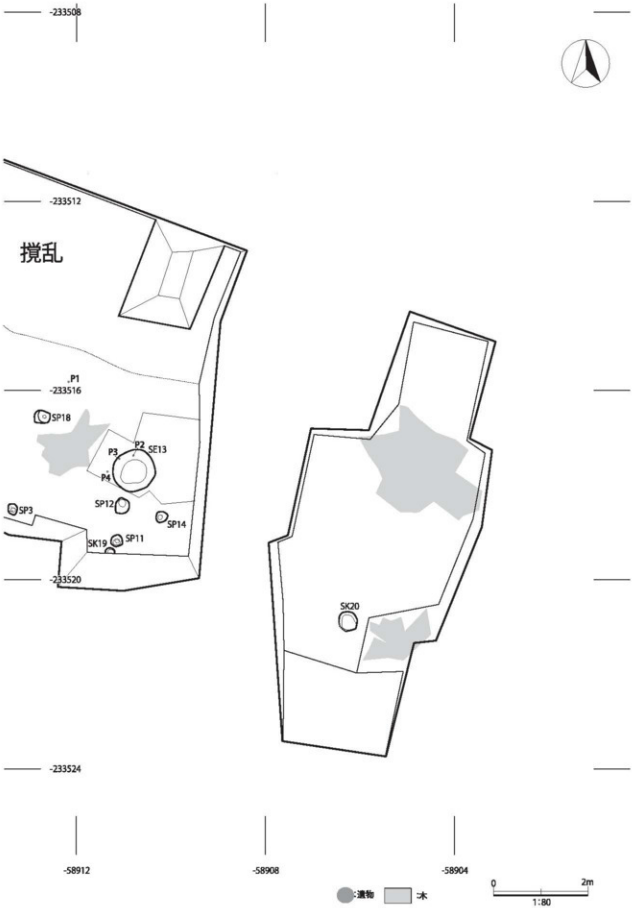
第5図　遺構全体図の割付図


-233504
-233508
-233512
-233516
-58936
-58932
-58928
-58924
SD2
SF1
SP28
SP24
285m
286m
286m
285m
286m
286m
:遺物
:木
0
2m
1:80

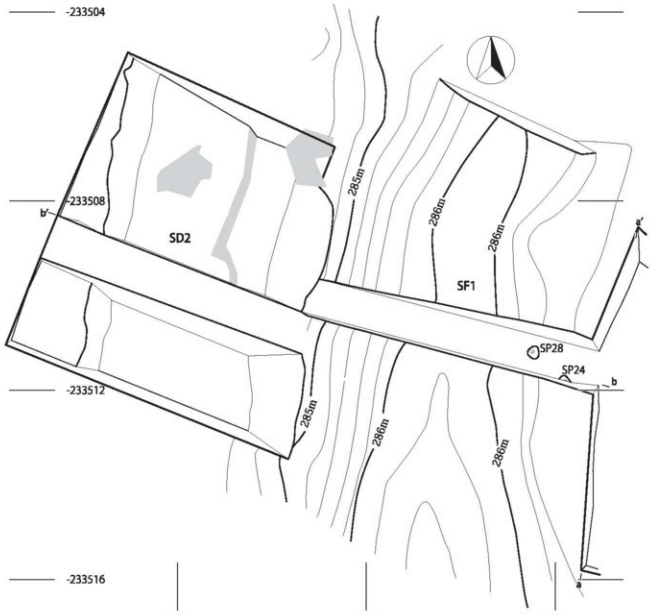
第６図　遺構全体図（1）

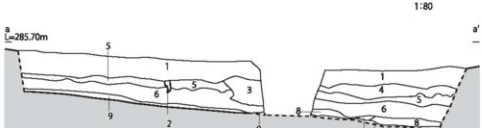

-233508
-233512
-233516
-233520
-58924
-58920
-58916
-58912
SP22
SP21
SP28
SP24
SP23
SP27
SP25
Q211
攪乱
SP26
SP16
SP17
-P1
SP9
SP10
SP18
SP7
SP8
SP6
SP4
SP5
SP3
:遺物
:石
:木
0
2m
1:80

第7図　遺構全体図（2）


-233508
-233512
攪乱
P1
-233516
SP18
P2
SE13
P3
P4
SP12
SP14
SP3
SK19
SP11
-233520
SK20
-233524
-58912
-58908
-58904
遺物
木
0
2m
1:80

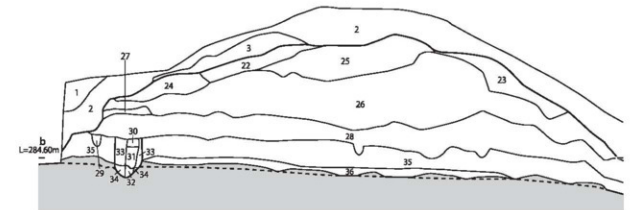
第８図　遺構全体図（3）

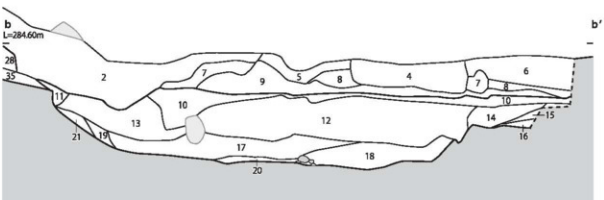




調査区西壁土層断面a-a'
1:10YR3/2黒褐色シルト　植物根を多く含む。
2:10YR2/2黒褐色シルト　(木の根の撹乱)
3:10YR3/2黒褐色シルト木の根を多量に含む。
4:10YR3/2黒褐色シルト　10YR4/4褐色シルトと10YR3/3暗褐色砂を上層に含む。
5:10YR3/1黒褐色シルト
6:10YR2/1黒色シルト(自然堆積層)
7:10YR2/1黒色シルト　粗砂を少量含む。
8:10YR2/1黒色シルト10YR3/2黒褐色粘質土(漸移層)
9:10YR3/2黒褐色粘質土(検出面)

第９図　調査区西壁土層断面、土墨SF1・堀跡SD2平面図


b
L=284.60m
1
2
3
22
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
23


b
L=284.60m
b'
2
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
28
35

:木
:石
0
1m
1:40

土塁 SF1・堀跡 SD2・柱穴 SP24 土層注記
1:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR3/1 黒褐色シルトをわずかに含む。木の根を多く含む。
2:10YR3/2 黒褐色シルト　木の根を多量に含む。
3:10YR4/4 褐色シルト 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを含む
4:10YR2/2 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトをまだら状に多く含む。(埋め土：整地層)
5:10YR3/2 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトをわずかに含む。レキを含む。(現代の撹乱)
6:10YR5/6 黄褐色シルト 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトをまだら状に含む。(埋め土：整地層)
7:10YR5/6 黄褐色シルト 10YR2/1 黒色シルトと 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトをまだら状に含む。(埋め土：整地層)
8:10YR5/6 黄褐色シルト 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトをまだら状に含む。(埋め土：整地層)
9:10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR3/1 黒褐色シルトを含む。炭化物をわずかに含む。
10:10YR2/2 黒褐色細砂 10YR4/4 褐色砂と 10YR2/1 黒色細砂の互層。植物遺体を含む。
11:10YR2/1 黒色シルト 10YR4/4 褐色シルトを少量含む。(土塁からのこぼれ土)
12:2.5Y3/1 黒褐色シルト 7.5YR5/6 暗褐色鉄土と炭化物を少量含み、未分解の植物遺体を少量含む。
13:10YR3/2 黒褐色粘質土　炭化物と風化石英、未分解の植物遺体を少量含む。
14:10YR3/2 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトをブロック状に少量含む。
15:10YR2/1 黒色シルト 10YR4/4 褐色シルトを少量含む。
16:10YR2/1 黒色シルト 10YR4/4 褐色シルトを含む。
17:10YR2/1 黒色シルト　粗砂と炭化物を含み、植物遺体を含む。
18:10YR1.7/1 黒色シルト　植物遺体を含み、炭化物をわずかに含む。
19:10YR2/2 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトを少量含む。
20:10YR3/1 黒褐色砂 小レキを少量含む。(底砂)
21:10YR2/2 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトを多く含む。
22:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトと 10YR2/1 黒色シルトを少量含む。(踏み上げた土)
23:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 植物の根を含む。(表土)
24:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR2/1 黒色シルトと植物根をわずかに含む。(踏み上げた土)
25:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR2/1 黒色シルトと 10YR4/4 褐色シルトをまだら状に少量含む。(踏み上げた土)
26:10YR3/1 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトと 10YR2/1 黒色シルトをまだら状に少量に含む。(踏み上げた土)
27:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR5/6 黄褐色シルトを含む。
28:10YR3/1 黒褐色シルト
29:10YR3/1 黒褐色シルト 10YR2/1 黒色シルトを少量含む。
30:10YR3/1 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトをわずかに含む。(以下 34 まで SP24 断面柱記)
31:10YR3/1 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトを含む。
32:10YR3/1 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトを多く含む。
33:10YR3/1 黒褐色シルト
34:10YR3/1 黒褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトを少量含む。
35:10YR2/1 黒色シルト (自然堆積層)
36:10YR2/1 黒色シルト 10YR3/2 黒褐色粘質土 (漸移層)

層序の分類
1～3：表土
SD2（Ⅰ層）:4～8（整地層と現代の撹乱）
SD2（Ⅱ層）:9～15
SD2（Ⅲ層）:16～18
SD2（Ⅳ層）:19～21
SP1:22～28
29: 植物根による攪乱層
SP24:30～34
35: 自然堆積層
36: 漸移層

第10図　土塁SF1、堀跡SD2土層断面図

SP3

a=X:-233518.419,Y:-58913.247

SP3
1:10YR3/1黒褐色シルト　10YR4/4褐色シルトを僅かに含む。(柱痕)
2:10YR2/1黒色シルト(掘り方)
3:10YR2/1黒色シルト 10YR4/4褐色シルトを斑状に多く含む。(調整土)

SP5

a=X:-233517.419,Y:-58914.547

SP5
1:10YR3/1黒褐色シルト　10YR6/6明黄褐色シルトを僅かに含む。
2:10YR3/1黒褐色シルト　10YR6/6明黄褐色シルトを斑状に多く含む。

SP6

a=X:-233517.419,Y:-58914.247

SP6
1:10YR2/1黒色シルト　10YR6/6明黄褐色シルトと炭化物を僅かに含む。
2:10YR6/6明黄褐色シルト　10YR2/1黒色シルトを僅かに含む。

SP7

a=X:-233516.419,Y:-58914.447

SP7
1:10YR2/1黒色シルト　10YR6/6明黄褐色シルトを斑状に含む。
2:10YR2/1黒色シルト　10YR6/6明黄褐色シルトを斑状に多く含む。

SP9

a=X:-233516.419,Y:-58917.047

SP9
1:10YR3/1黒褐色シルト　10YR4/4褐色シルトを僅かに含む。(柱痕)。
2:10YR2/1黒色シルト　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトを斑状に含む。(掘り方)。

SP10

a=X:-233516.419,Y:-58913.747

SP10
1:10YR3/1黒褐色シルト　10YR4/4褐色シルトを僅かに含み、礫を含む。
2:10YR2/1黒色シルト　10YR4/4褐色シルトを斑状に含む。

SP11

a=X:-233518.419,Y:-58911.047

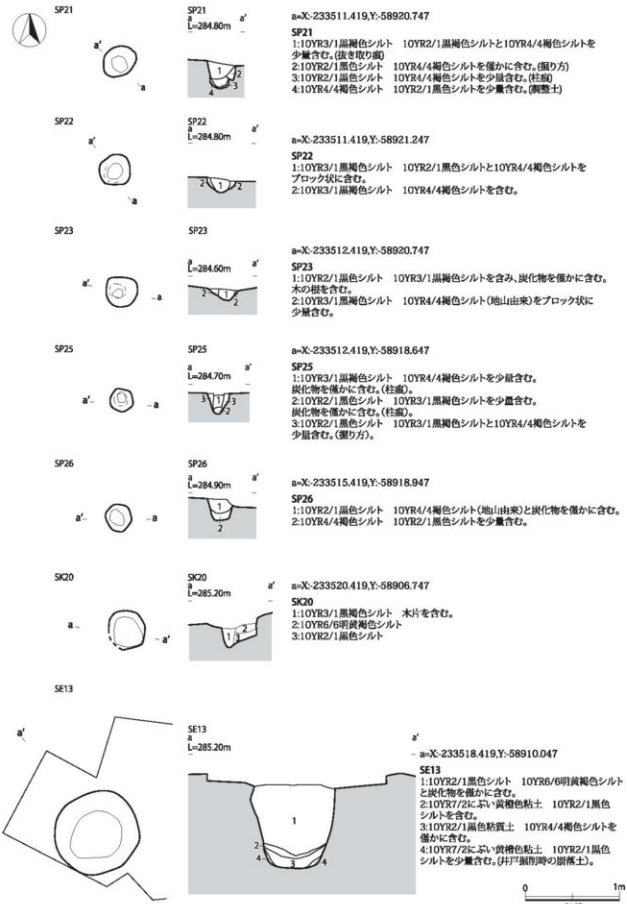
SP11
1:10YR3/1黒褐色粘質土(柱痕)
2:10YR2/1黒色シルト　10YR4/4褐色シルト(地山由来)を少量含む。
(掘り方)。

SP12

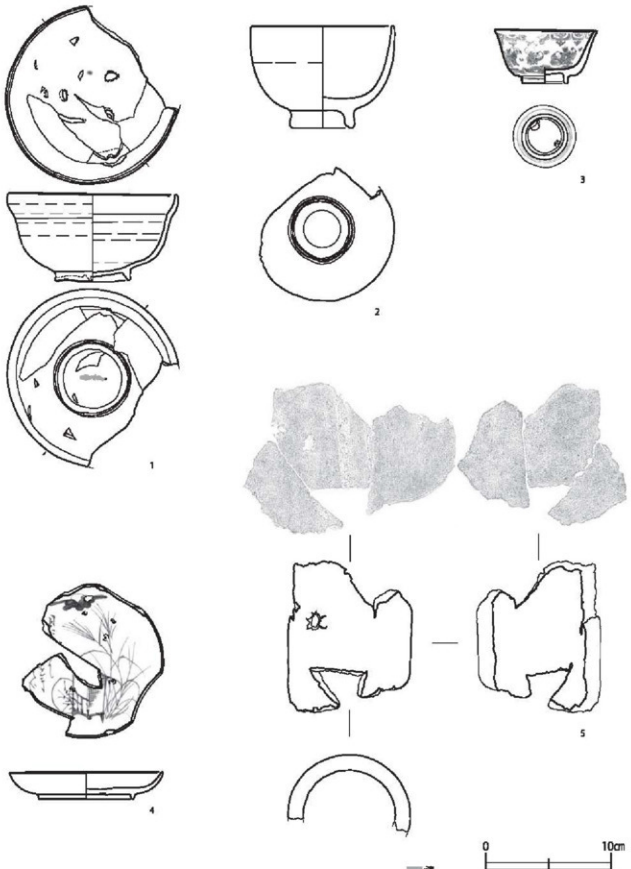
a=X:-233518.419,Y:-58910.947

SP12
1:10YR2/1黒色シルト　10YR6/6明黄褐色シルトをブロック状に含む。
2:10YR3/1黒褐色シルト　10YR6/6明黄褐色シルトを斑状に多く含む。
3:10YR2/1黒色シルト　10YR6/6明黄褐色シルトを斑状に含む。
4:10YR6/6明黄褐色シルト　10YR2/1黒色シルトを少量含む。

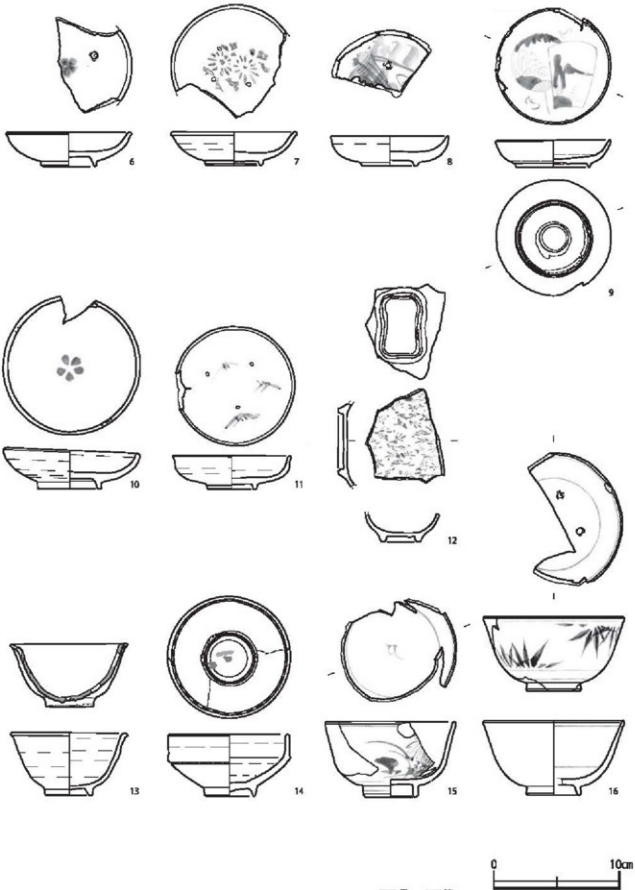
第11図　柱穴SP3・5・6・7・9・10・11・12



第12図　柱穴SP21・22・23・25・26、土坑SK20、井戸跡SE13

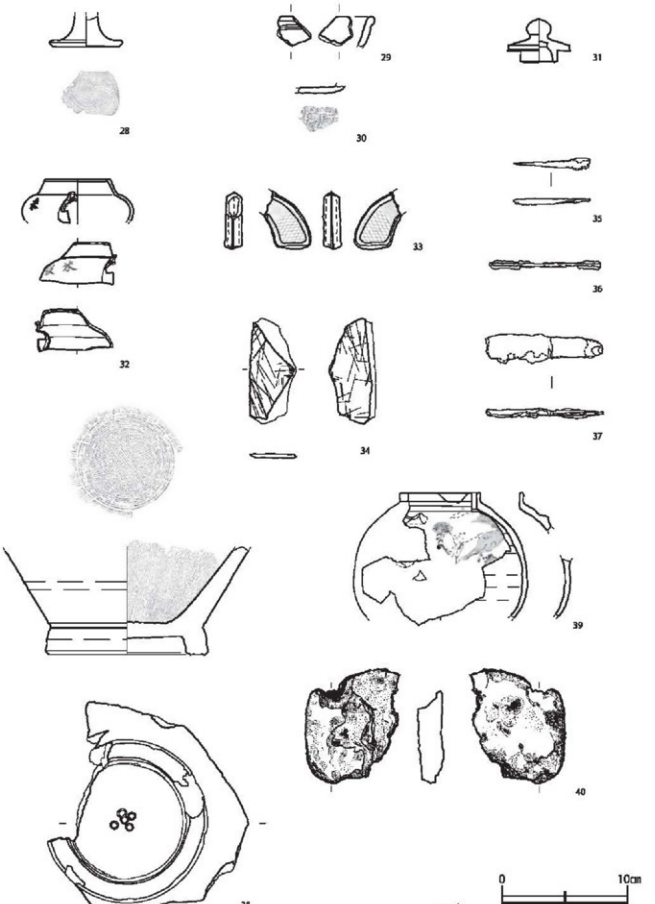


第13図　堀跡SD2：Ⅰ、Ⅱ層出土遺物

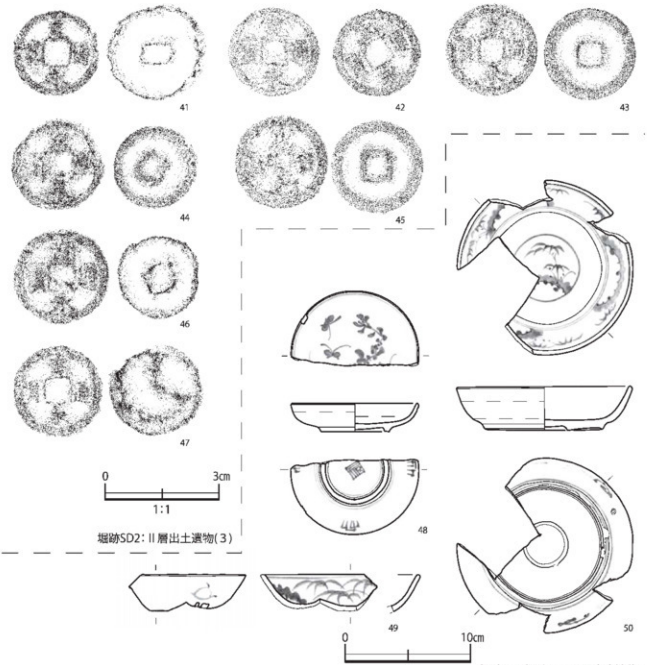


第14図　畑跡SD2：Ⅱ層出土遺物（1）

第15図　堀跡SD2：II層出土遺物 (2)

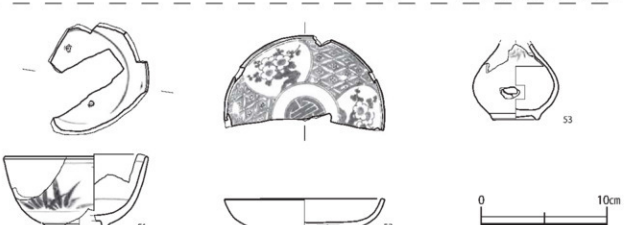


第16図　堀跡SD2：Ⅱ層出土遺物（3）

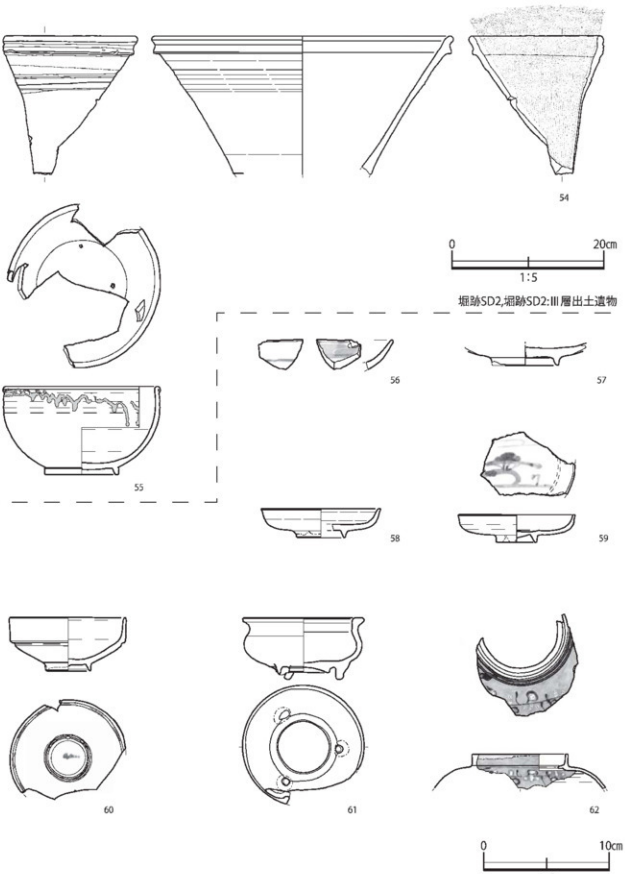


堀跡SD2：Ⅱ層出土遺物(3)

堀跡SD2,堀跡SD2:Ⅱ層出土遺物

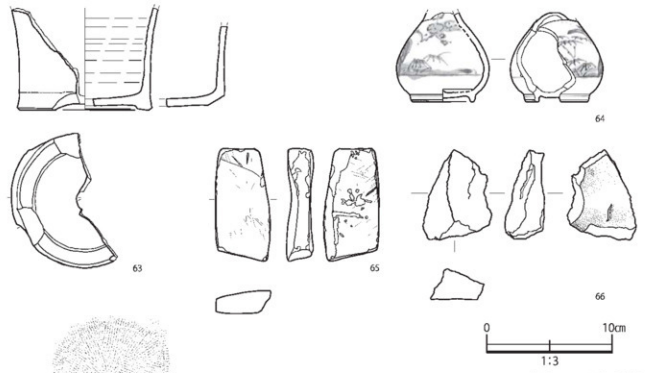


第17図　堀跡SD2、Ⅱ、Ⅲ層出土遺物

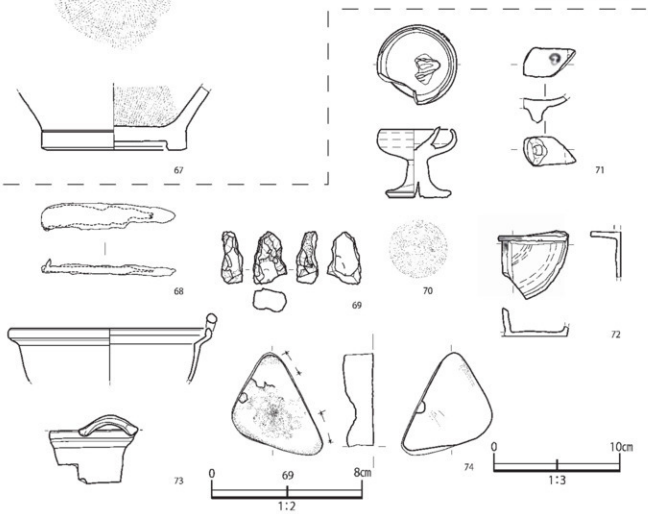


堀跡SD2,堀跡SD2:III層出土遺物

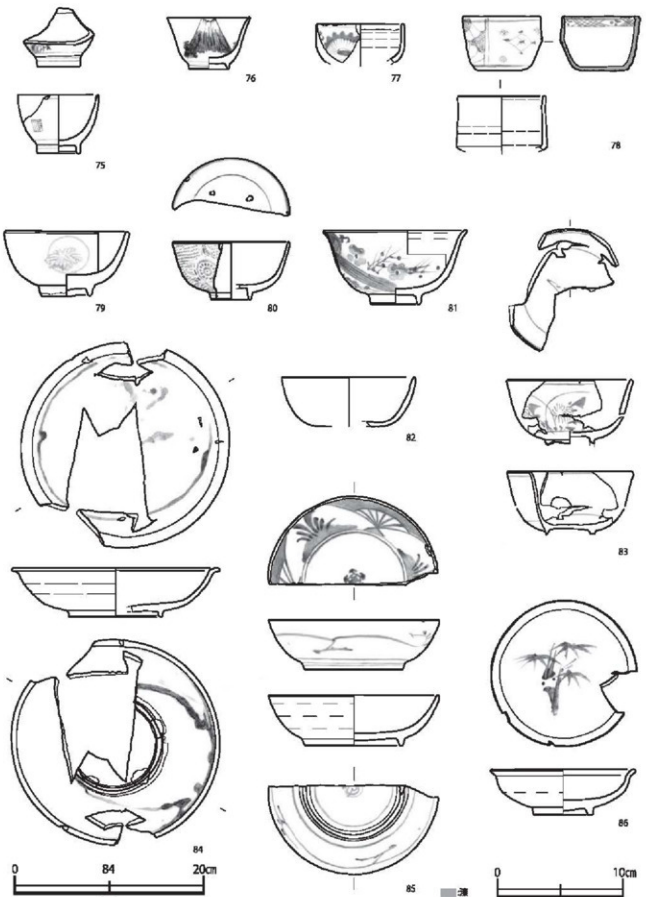
第18図　堀跡SD2：III層出土遺物



堀跡SD2:Ⅲ層出土遺物



第19図　堀跡SD2出土遺物（1）



第20図　堰跡SD2出土遺物（2）

第21図　遺構外出土遺物

写真図版

土墓SF1調査前状況（南東から）

東側遺構検出状況（西から）

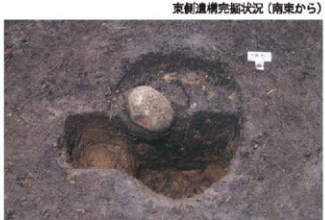
柱穴SP3断面（西から）

柱穴SP5断面（西から）

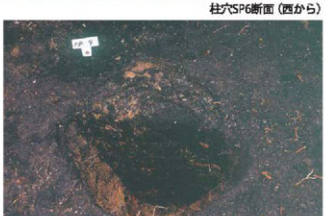
東側遺構集中部完掘状況（南東から）

東側遺構完掘状況（南東から）

柱穴SP6断面（西から）



柱穴SP7断面（西から）



柱穴SP9断面（東から）

柱穴SP10断面（西から）

柱穴SP11断面（南西から）

柱穴SP12断面（西から）

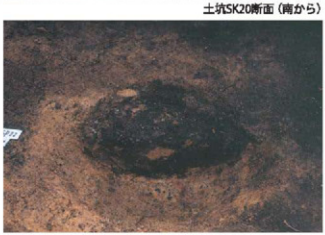
井戸跡SE13断面（北から）

井戸跡SE13完掘状況（北から）

西側検出状況（東から）

土坑SK20断面（南から）

柱穴SP21断面（北東から）



柱穴SP22断面（北東から）

柱穴SP23断面（北から）

柱穴SP25断面（北から）

柱穴SP26断面（北から）

西側遺構集中部完掘状況（西から）

土塁SF1断ち割り状況と断面（東から）

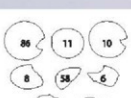
土塁SF1全景（北から）

土塁SF1全景と堀跡SD2（北から）

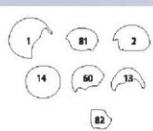
堀跡SD2検出状況（東から）

堀跡SD2断面（北西から）

堀跡SD2完掘状況（北西から）



陶器：皿内面、碗外形（81のみ磁器）



陶器：皿底部、碗底部（81のみ磁器）

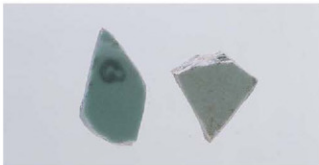
84（外形）

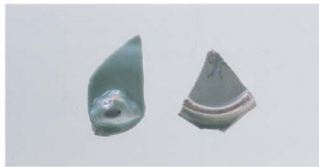
84（底部）

55（外形）

55（底部）

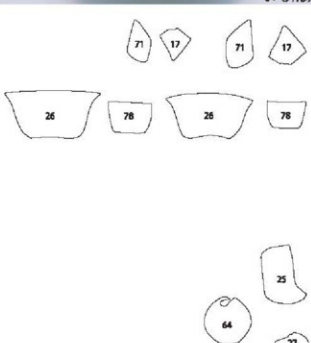
陶器：鉢、土瓶、小壺、小鍋

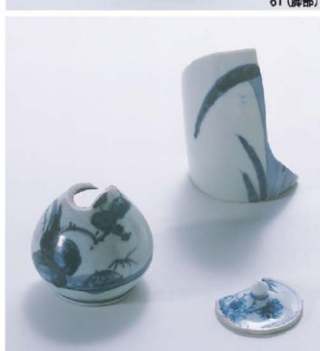




61（外形）

61（脚部）

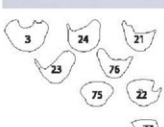


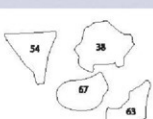


磁器：碗底部、鉢、青磁香炉、小壺、花瓶、蓋

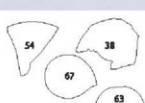
磁器：皿（外形）、碗（外形）

磁器：皿（底部）、碗（底部）

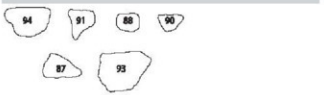


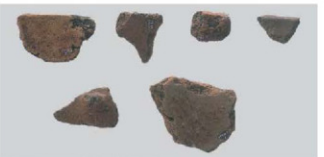


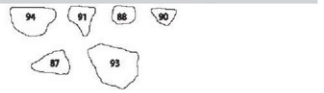
磁器：小坏（外形）、陶器：擂鉢（外形）、檜木鉢（外形）

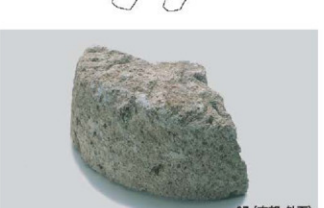


磁器：小坏（底部）、陶器：擂鉢（底部）、植木鉢（底部）

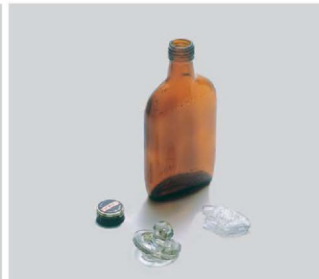


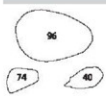


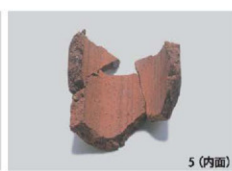


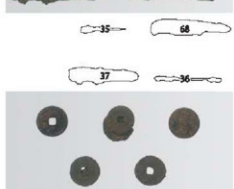


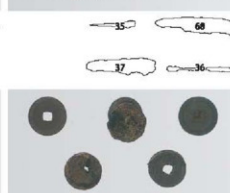
土器：内耳土鍋・かわらけ、石製品：火打石・砥石・石臼











石製品：凹石、ガラス製品、土管、金属製品：刀子？・釘・古銭

報告書抄録

ふりがな	いなりやまたてあとだいさんじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	稲荷山館跡第３次発掘調査報告書
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第208集
編著者名	渡辺和行
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3246　山形県上山市中山字塵屋敷5608番地　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2013年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘期間	調査面積 ㎡	発掘原因
いなりやまたてあと 稲荷山館跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 おおあざすぎやま 大字梓山 あざいなりやま 字稲荷山	6202	405	37° 53′ 40″	140° 09′ 48″	20110825 ～ 20110922	450	国道13号 米沢拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷山館跡	城館跡	中世 近世	土塁　1 堀跡　1 井戸跡　1 柱穴　13	陶磁器 内耳土鍋 古銭	（文化財認定箱数：６）

要約

今回の調査で初めて土塁に平行する堀跡の幅を確認することが出来た。堀跡は出土した遺物と覆土から近代に入るまで継続して使用され近世末期以降段階的に埋まり、昭和初めごろには完全に埋没していたことが確認された。

土塁について堀跡を掘った際に出た土を段階的に土塁の構築土として使用したことが確認された。

館跡内部では井戸跡や柱穴が検出された。それらの遺構は調査区の南側に集中しており、建造物が南に存在していたと考えられる。なお、調査区の北側は砕石で覆われており、現代の土地利用により攪乱を受けていることが確認出来た。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第208集

稲荷山館跡第３次発掘調査報告書

2013年３月29日発行

発行　公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3246　山形県上山市中山字堤屋敷5608番地
電話　023-672-5301
印刷　株式会社アサヒ印刷
〒990-2251　山形県山形市立谷川二丁目486-14
電話　023-686-4331